

ノースアジア大学国際観光研究

第 15 号



2022 年 3 月

目 次

論 文

- 地方におけるアフターコロナに資する観光教育
—観光社会学からのアプローチ— 井 上 寛 1

研究ノート

- Dark Tourism Sites of Note in Akita Prefecture
with Foreign Connections デファルコ・リーア・アン 17

- アドルフ・ホフマイステルの日本観に関する一考察
—1957年執筆「私の見た日本について」を中心に— 半 田 幸 子 27

活動報告

- 令和3年度私立大学等即戦力人材育成支援事業
—国際観光学科生の秋田県内企業への就職促進のための諸施策— 横 田 恵三郎 43

- 地域再生論における事例研究
—八峰町・にかほ市におけるフィールドワーク— 井 上 寛 59

〔論 文〕

地方におけるアフターコロナに資する観光教育

—観光社会学からのアプローチ—

井 上 寛

はじめに

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）は、2019年12月に中国湖北省武漢市で感染者が報告されて以降、2020年1月には、日本を含む世界中がパンデミックとなり、世界保健機関（WHO）が緊急事態を宣言する事態に至った。とりわけ移動を前提とする観光関連産業が大打撃を受けていることは周知の事実である。そのパンデミックが拡大する以前、2016年に政府が策定した「明日の日本を支える観光ビジョン」では、訪日外国人旅行者数2020年に4,000万人、2030年には6,000万人という目標値を掲げていた¹⁾。国をあげて観光立国政策を推進した結果、訪日客数は2019年には3,188万人まで増加を記録した²⁾。

その一方で、国内の観光地でも、オーバーツーリズムの問題を抱えていたことは記憶に新しい³⁾。これらの問題は、従来の観光政策が経済的視点つまり利潤追求に偏重しすぎていた結果ではないだろうか。観光の研究・教育の場面においても同様であろう。そこで、COVID-19パンデミック終息後のアフターコロナの観光のあり方について、観光現象によってもたらされる社会や文化の変容の分析さらに、秋田県をはじめとした地方特有の課題について、観光社会学の知見をもとにした研究や教育に取り組むことが有用なのではないかと考えた。本稿は、筆者が本学で担当している観光社会学の講義内容を概観したうえで、アフターコロナにおける地方が抱えるさまざまな課題の解決の糸口となる観光研究そして観光教育はどのように取り組んでいくべきかについて述べることを目的としたい。

2. 観光社会学からアプローチする意義

後述するが、社会学とは19世紀のヨーロッパに誕生した近代化する社会の形態や変動を探究する学問であり⁴⁾、観光社会学は多種多様な連字符社会学の一領域として位置づけられる。社会学の誕生と時期を同じくして観光も近代社会に典型的な社会現象としてみられるようになった。つまり社会学と観光の双方は近代社会によって生み出されたのである。

この研究領域に多くの業績を生み出している安村（2011）は、「観光社会学とは、社会現象としての観光の本質を探究し、その成果を手がかりに社会の本質をも考察する社会学の一分野である」と述べている⁵⁾。つまり観光社会学によって、単に「観光」という現代社会に特有の現象として捉えるのみならず、それを入口として、社会で起こる諸問題を映し出す道具としても活用することが期待できる。そして、人びとの移動や交流という広い観点からそれらを取り巻く社会や文化について、マスツーリズム、オーバーツーリズム、インバウンド観光、グローバル化など極めて現代的な現象から、複雑な社会や文化について理解することができる。

いま、「アフターコロナにおける観光はどのように変化していくのか」という問題意識は、われわれ観光の研究・教育関係者はもちろんのこと、観光産業に携わる人びとのみならず、不要不急の外出を制限されているすべての人びとに共通のものであろう。そしてわずかな期間でウィルスを地球規模まで拡散させたという事実は、観光がこれほどまでに世界に影響を与えているとも理解できる。また、人びとが移動することを前提にした社会からの急激な変化がいま実際に起こっている。これらを解明する糸口として観光社会学の知見が役に立つ可能性がある。

3. 観光社会学の講義内容

それでは、観光社会学の視点を概観するために、筆者が本学で担当する観光社会学の講義の内容を紹介する。本講義は1年次を配当年次としているが、必修科目である観光の入門科目を前期に受講済であることから、観光のアウトラインは掴めているものとして講義内容を編成している⁶⁾。また、本学の国際観光学科は法学部に設置されており、社会学は専攻していない。したがって、は

じめて社会学を学ぶ学生にも理解しやすいよう、社会学の基本概念も学修できるような内容とした。

本講義では、(1)観光社会学理論のアウトラインおよびその体系を基礎レベルで理解できること、(2)観光社会学に関する研究成果を用いて現代の様々な観光をめぐる事象を理解できること、の二点を段階的な到達目標として設定している。その理由として、実学である観光学では、フィールドワークとして実践的な研究方法が重視されるが、これらを実践するためには、社会で起こる諸問題を分析するための理論や視点を学ぶことも必要であるからである。前述した到達目標ごとに講義内容を概観しよう。

(1)観光社会学理論のアウトラインおよびその体系

本講義の第一段階の目標として設定した、「観光社会学理論のアウトラインおよびその体系を基礎レベルで理解できること」について概要を紹介する。

2で述べた観光社会学を学修する意義を確認したうえで、観光社会学の研究対象をはじめ、社会学と観光の誕生からマスツーリズムの出現とその弊害、そして持続可能な観光へと続く一連の観光史を社会学の視点から確認し、重要な議論のアウトラインが理解できる構成とした。

1)社会学と近代観光の誕生

はじめに、産業革命という社会変動を契機に近代観光が出現したという事実を確認した。つまり、社会学と観光は近代化による産物であることについて確認したうえで、「近代観光の父」と呼ばれるクックが、19世紀に開業間もない鉄道を貸し切り日帰りの禁酒ツアーを催行したことが、近代観光の出現に大きな役割を果たしたことについて確認した⁷⁾。つまりイギリスにおいて、観光が市民に普及していった背景として、これまでの有閑階級とは異なる新たな富裕層の出現、社会生活による労働と余暇の分離、鉄道の発展など、これらは資本主義経済の発展として説明することができる。

2)観光社会学研究のターゲット

次に、観光社会学研究のターゲットに関する枠組みについて、安村（2011）

が提示した、社会学の研究領域の社会空間について、行為者を起点として社会関係、社会システム、グローバル社会の4つの次元について紹介した⁸⁾。

行為者の次元は、後述するコーエンに代表される、観光者の観光行動を社会的行為として分析し観光者を類型する研究であり、社会関係の次元は、ゲスト・ブローカー・ホストの相互行為に注目する研究や⁹⁾、ドクシーによるイラダチ度モデルである¹⁰⁾。社会システムの次元は、観光と地域社会関係の研究であり、観光地自体を社会システムとしてみることにより、マスツーリズムがシステムの外部要因として犯罪などの社会問題を引き起こし文化変容や環境問題も惹き起こす事態が考察されることを確認した。最後の「グローバル社会の次元」は、国際観光やグローバル社会関係の研究で、南北問題や環境問題が発生した原因は、近代世界システムの歴史的形成過程で近代化を先に達成した先進諸国が、搾取、浸透、分断、辺境化などを通して未達成の発展途上国に対して社会的な不平等や不正義をもたらしたことについて確認した¹¹⁾。

3) マスツーリズムの出現とその弊害

マスツーリズムの出現とその弊害については、前述した観光学の入門科目において既習済であるが、ここでは近代化の視点から理解を深める内容とした。もともと観光は有閑階級の特権であったが、第二次世界大戦後の荒廃から復興した先進諸国において大衆にまで広がり、日本においては、1960年代頃から「マスツーリズム」の時代を迎えた。そして同時期に、大量生産・大量消費社会の実現を迎え経済的な豊かさが大衆まで浸透した。1970年代以降、アメリカと西欧に加え日本も観光送り出し国となった¹²⁾。その弊害として、観光地の文化変容、犯罪や売春の発生、環境汚染など、ホストとゲスト間にある社会経済的な不均衡としてネオコロニアリズムとして批判の対象となったことについて確認した¹³⁾。

4) 新しい観光—持続可能な観光とスペシャルインタレストツーリズム

前述した理由から、1970年代後半よりマスツーリズムが批判されるようになり新しい観光が模索され始めるようになった。1980年代後半になると、世界観光機関（UNWTO）が新しい観光形態の実践を世界の観光地で先導するよう

になり、それらはさまざまな名称で呼ばれた¹⁴⁾。1990年代初頭の報告書で、“Sustainable Tourism Development”と表記されたのち、観光研究においてサステナブルツーリズムが広く使用されるようになった¹⁵⁾。

また、1999年10月に発表された「世界観光倫理憲章」では、環境、文化遺産、社会に与える潜在的な悪影響を最小限にしながら、観光の発展を最大限に引き出すことを目的とし、各国政府、観光業界、地域社会、旅行者等の全てのステークホルダーが、責任ある持続可能な観光を実現するための規範としている¹⁶⁾。これとは別に新しいツーリズムの尺度として、ニューツーリズムやスペシャルインタレストツーリズムの概念についても確認した¹⁷⁾。

5) 観光のまなざし

アーリーによる『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』は、観光社会学研究において重要な文献であり、その内容について紹介した¹⁸⁾。まなざしとは、フーコーが『臨床医学の誕生』において論じた「医学的まなざし」の概念であり、このまなざしを、アーリーはそれを観光の場面に応用しようとしたのである¹⁹⁾。

アーリーは、観光という体験の一部は、日常から離れた異なる景色・風景・街並みなどに対して「まなざし」を投げかけることであると論じた。また、観光のまなざしには、それを構成し発展させることを後押しする多くの職業専門家、つまり観光関連産業に従事する人びとがいるのは医学的まなざしと同様であること、どの時代の「まなざし」もその反対概念である「非観光形態」との関係性から構成されるという特徴を持っており、アーリーは、これらについて逸脱論を用いて説明した²⁰⁾。つまり観光は日常生活からの「逸脱行為」であり、観光客のまなざしの形成について考察することは、非観光形態によって構成される「正常な社会」でなにが生起しているのかを理解するために優れた方法であるとしている²¹⁾。なお、アーリーは観光のまなざしの対象を①ロマン主義的対集合的、②歴史的対現代的、③本物対まがい物の二項対立でうまく分類できると説明しており²²⁾、そのうち①について、何が「ロマン主義的まなざし」で何が「集合的まなざし」なのか、具体的な観光地の場面で考察し理解を深めた。

6) 観光経験の類型

コーエンは『観光経験の現象学』において、観光経験を5つのモードに類型した。それは、日常の退屈さから逃れようとする際の観光経験である「気晴らしモード」、日常的な労働活動の場からの一時的な離脱が目的の「レクリエーション・モード」、訪問先で生きる人々の生活様式や価値観に憧れすごいと思うような感覚を持ち、これこそがオーセンティックなライフスタイルだと考えるに至るような観光である「経験モード」、他者の生活に憧れ感動するだけでなく、実際にそこに参加して体験しようとする「体験モード」、単純な「体験」とどまらずに自分たちの生活様式や価値観を捨て去り、観光で知った他者の生活様式や価値観を永遠に自分のものにしようとする「実存モード」の5つがある。観光経験はメディアによって仕組まれた人工的で懐疑的なものから、観光地で暮らす人々の本物の暮らしや真正な文化に浸るものへ変わっていくことを理解することができる²³⁾。

(2) 観光社会学理論を用いた研究事例

次に、観光社会学の講義における第2段階の目標である、「観光社会学に関する研究成果を用いて現代の様々な観光をめぐる事象を理解できること」を達成するために、観光社会学の理論をベースに、テーマパークや秋田県の事例など、学生に身近なテーマを用いた講義内容の一部を紹介する。

1) オーセンティシティとシミュラークル

ブーアステインは『幻影の時代』(1962=1964)において、「われわれの興味の大部分は、われわれの印象が新聞映画テレビに出てくるイメージに似ているかどうかをしりたいという好奇心から生まれる」と「疑似イベント論」を唱えた²⁴⁾。一方でマキヤーネルは、『ザ・ツーリスト』(1999=2012)において、ゴフマンの理論を援用し、観光客はオーセンティシティ（真正性）を求めており、観光客はだれでも見られる場所である表舞台（フロント）ではなく観光客のために演出されていない現地の人だけが知っている場所や文化である舞台裏（バック）を求めているとブーアステインに異議を唱えた²⁵⁾。一方、ホードリヤールは『シミュラークルとシミュレーション』(1981=1984)において、オリジナル（本物）

に対するコピー（ニセモノ）のあり方を「シミュラークル」として総称して、最初から「本物」が存在しない、メディアのバーチャルだけでつくられたシミュラークルを特に「シミュレーション」と呼び、本物という基準点が失われ、本物か偽物の議論に意味がなくなったのは現代社会の特徴であると論じた²⁶⁾。この文献でもディズニーランドを事例として説明しているが、より具体的に東京ディズニーランドとそのキャラクターにあてはめて説明し、理解しやすい内容とした。

2) 伝統の創造—秋田のまつり

歴史学者のホブズボウムは、『創られた伝統』（1983=1992）において、伝統は、その実往々にしてごく最近成立したり、また時には捏造されたりしたものもあると論じた²⁷⁾。また、観光人類学者の橋本(2011)は、地域の人々が発見・創造し、育て上げたものが地域文化であり、それらは地域の特徴を刻印された地域性（ローカリティ）と深く関係し、そのことを反映するものと考えられる。その地域性もまた所与のものではなく発見・想像され、人々によって育てあげられるものであるとした²⁸⁾。これらを踏まえた上で、この事例として、「男鹿のナマハゲ」の成り立ちと、マスツーリズムに対応するイベントとして1964年から開催されるようになった「なまはげ柴灯まつり」や、その観光客向けに創作された「なまはげ太鼓」を紹介した。

3) 観光まちづくり

岐阜県高山市は「住みよいまちは行きよいまち」という考え方を基本に取り組んできた、いわば観光まちづくりの先進地域のひとつである。「飛騨の小京都」として、1970年代より観光客を順調に伸ばしていたが、国鉄分割民営化やバブル崩壊のあおりを受け、1990年代初頭には観光客が激減し、基幹産業である観光産業の活性化が急務であった。そこで高山市は、全国平均よりも高い高齢化率であったこともあり、行政を中心に高齢社会に向けた観光誘致とさまざまなバリアフリー化施策に取り組んだ。その結果、高山市は観光客が倍増し、「福祉観光都市」として国内外より高い評価を得るようになった。さらにこの考え方を訪日外国人観光客にも拡大し、言語のバリアフリー化も積極的に推進

し、パンデミック前は多くの外国人が訪れる人気の観光地となったのである²⁹⁾。また、秋田における事例として、横手市増田町の「増田の内蔵」を中心とした文化財保護の視点からの観光まちづくりの研究事例も紹介した³⁰⁾。

4. アフターコロナに資する地方の観光教育に向けて

これまで観光社会学の理論をベースにした講義内容を概観してきたが、これらを踏まえ、秋田をはじめとする地方において、アフターコロナの観光研究および教育に向けてどのように取り組むべきかについて、3つの視点から述べていく。

(1) あいまいになる日常と非日常の境界

世界観光機関（UNWTO）は、観光（tourism）とは「レジャー、ビジネス、その他の目的で、連続して1年を超えない期間、通常的生活環境から離れた場所を旅行したり、そこで滞在したりする人の活動」であると定義している。日常的生活環境を離れた場所とはつまり、非日常の場所のことを指しているが、ビジネスを含むなど、目的についてはかなり広い範囲を示している。

アーリーは、旅は、住まいや労働のある通常の場合以外の場所へと向かうこと、滞在はその場に留まることである。そこでの滞在期間かつ、短期でかつ一時的という性質を持ち、比較的近いうちに「家」へ戻るという心積もりがあり、その場所は、賃労働と直接結びつかない対象で、通常の労働と対比されるようなところであると述べている³¹⁾。

COVID-19パンデミック後には、第3のニューノーマルとよばれる人々の生活様式の大きな変化が起こった³²⁾。また、自宅から1～2時間程度の移動圏内の「地元」で観光する近距離旅行で、地域の魅力の再発見と地域経済への貢献を念頭に置いた旅行形態であるマイクロツーリズムも提唱された³³⁾。感染防止のためのソーシャルディスタンスなどにより、われわれの生活環境は大きく変化し、テレワークや在宅勤務といった働き方にも変化が現れた。また、地方創成の切り札としてすでに注目されていたが、テレワーク等を活用し、リゾート地や温泉地、国立公園等、普段の職場とは異なる場所で余暇を楽しみつつ仕事を行う「ワーケーション」が注目されている³⁴⁾。日常と非日常の境界が、より

曖昧なものになりつつあることがこのことから理解できるが、ワーケーションによりその地域に魅力を感じる契機となり、コーエンの理論を援用して説明すれば、「体験モード」を経て「実存モード」に向かうことにより、移住へとつながるのではないか。

(2)レスポンスブルツーリズムの必要性

冒頭でも述べたように、アフターコロナのマスツーリズム型、イベント型観光のあり方について再考する余地は大いにある。

持続可能な観光の延長線上にある「レスポンスブルツーリズム」とは、「責任ある観光」を意味し、観光客が自身をツーリズムを構成する重要要素の一つと捉え、責任ある観光を通じて、よりよい観光地をつくり上げようという新しい考え方である。

コロナ禍以前には、前述したマスツーリズムや訪日インバウンド観光客の急増に伴い、観光地ではオーバーツーリズムによる様々な弊害が問題視されるようになった³⁵⁾。これは秋田でも例外ではなく、観桜や花火大会、まつりなどのイベント開催時に、局所的にオーバーツーリズムが発生することは問題であり地域が疲弊する³⁶⁾。

前述した男鹿市で2月に開催される「なまはげ柴灯まつり」では、2021年（第58回）より、事前申し込み制による人数制限やワクチン接種済証明書等の提示と、観光客に入場協賛金の負担を求めていることは、レスポンスブルツーリズムに向けた新たな動きであると理解できる³⁷⁾。

また、2015年には国連によって「持続可能な開発目標（SDGs）」が提唱され³⁸⁾、さらに、2017年の「開発のための持続可能な国際観光年」により、観光がSDGsに貢献する次の5つの領域が提示されたことをうけ、より注目されるようになった³⁹⁾。特に、「誰一人取り残さない」（leave no one behind）という誓いは、後述するユニバーサルツーリズムにも通底する。

(3)ユニバーサルツーリズムの実現に向けて

ユニバーサルツーリズムとは、「すべての人が楽しめるように創られた旅行であり、高齢や障害等の有無に関わらず誰でもが気兼ねなく参加できる旅行」

と観光庁が定義している⁴⁰⁾。この概念が生まれた背景には、メイスによって、ユニバーサルデザインとその7原則が提案されたことに端を発している⁴¹⁾。これらを実現させるために、東京オリンピック・パラリンピック2020に向けて、「ユニバーサルデザイン2020行動計画」が取り組まれた⁴²⁾。その根底にある「障害の社会モデル」というにも注目したい⁴³⁾。ユニバーサルツーリズムは、高齢者や障害者への対応のみならず、訪日インバウンド観光客に対し、ツアーへの参加者や観光施設内で多言語対応や相手の文化への理解など、取り組むべき内容は広範にわたる。

長野県では、県が取り組んでいるユニバーサルツーリズムに関する施策を「信州型ユニバーサルツーリズム」と称し、県民の温かいサポートとおもてなしの心で「山も谷も乗り越え・学ぶ」ユニバーサルツーリズムの実現に取り組んでいる。この施策の三大特徴として、①人材：地域でのサポート体制の充実、②機器：サポート機器の充実、③地域：信州ならではのバリアである山や自然を観光資源として活用するとし、さまざまな取り組みを行っており、さまざまな取り組みを行っている。とりわけ③について、バリアとして捉えるのではなく、資源として捉えていくこの考え方は、地方の観光に取り組むうえで重要ではないか⁴⁴⁾。

むすびにかえて

本稿では、アフターコロナに向けてローカライズされた観光社会学を学ぶ視点について一考察を述べた。とりわけ実践的な学びが要求される観光の学問領域において、社会現象としての観光の本質を探究し、その成果を手がかりに社会の本質をも考察する観光社会学を学ぶことは、経済的豊かさを追求するのみならず、社会や地域の幸福を考えるための一助となる。

また、今回のパンデミックによって、世界中を自由に観光することかできない辛さを全世界で分かち合った。アフターコロナの時代には、観光者は責任ある観光を実践することにより、どんな人でも気兼ねなく観光することができる社会を実現させることが重要ではないか。すべての人にとって観光することは、決して「不要」ではないのである。

本稿で紹介した、先人たちが築き上げた社会学の諸理論は、全て社会調査に

よって実証的に研究されてきたといっても過言ではない。つまり、実社会から得られた知見なのである。観光教育は、ともすれば実務教育に傾注しがちであるが、目指すべき実学教育は理論と実践の融合が重要であることは言うまでもない。学問的視点のほか、その研究手法である社会調査について理解し、職業体験を含めた広義のフィールドワークを実践してはじめて、実学としての「観光学」は成立し得る⁴⁵⁾。

フーコーは、『狂気の歴史—古典主義時代における—』において、中世から近代にいたる歴史のなかで狂気がどのように扱われてきたかについて、「監禁」をテーマに論じている。拙著（2010）においてもフーコーの問題意識を援用しているが、筆者はこの視点が観光社会学の研究において重要な視点であると考えており、最後に紹介しよう。

つぶやき気味のあの不完全な言葉のすべてが忘却の淵にしずめられた。狂気についての理性の側の独白にほかならぬ精神医学の言語は、その基礎には上述の沈黙しかもらえなかった。私は、この言語の歴史を書こうとしたのではない。むしろこうした沈黙についての考古学をつくりだすことが私の意図である⁴⁶⁾。

フーコーのいう「つぶやき」や「沈黙」という言葉に注目したい。彼は、監禁される人、つまり理性的ではないさまざまな「非理性」、つまり弱い立場側の声なき声を描き出そうとしたのである。かつてより問題であった地方の人口減少は進み、COVID-19のパンデミックにより、観光関連産業も深刻な打撃を受けている。フーコーのように、マイノリティへの視点を忘れることなく、声なき声に耳を傾け、社会の諸問題を検証していくことのできる「人」と「心」を育成する観光教育に取り組むことは、アフターコロナの地方の観光を考える上で重要であると筆者は考える。

註

- 1) 明日の日本を支える観光ビジョン構想会議（2017）、2 ページ。
- 2) 日本政府観光局、WEB サイト。

- 3) オーバーツーリズムについて、世界観光機関(UNWTO)は「目的地またはその一部に対する観光の影響が、市民および／または訪問者の生活の質にマイナスの影響を過度に与える影響」と定義しており、他にもさまざまな定義が試みられてきた。
- 4) フランスのA. コントやイギリスのH. スペンサーによって社会学が生み出されたとされる。
- 5) 安村・堀野・遠藤・寺岡編著(2011)、8ページ。
- 6) 観光学の入門科目として、「観光論入門Ⅰ」が開講されている。
- 7) 1841年7月5日に、イギリスのミッドランド・カウンティーズ鉄道のレスターからラフバラまで、570名の禁酒論者向けの日帰りツアーが催行された。
- 8) 安村・堀野・遠藤・寺岡編著、前掲書、12-13ページ。
- 9) 人類学者のV. L. スミスによって提唱された概念である。
- 10) 観光開発が地域住民の価値体系を次第に破壊し、地域のアイデンティティを喪失させるにつれて地域住民にストレスを与えはじめ、地域住民が観光という行為や観光客達に対する「イラダチ」が増大するとされている。
- 11) I. ウォーラーステインによる、資本主義社会が中心(開発途上国)一半周辺(開発途上国)一周辺(低開発国)の三層に世界を構造化するという概念。
- 12) 安村・堀野・遠藤・寺岡編著、前掲書、20-21ページ。
- 13) 政治的には独立を認めながら、経済援助などの形で旧宗主国が経済的実権を手放さないまま、事実上、従来の支配・従属関係を維持しようとする植民地主義の新しい形態のことをいう。同上書、23ページ。
- 14) オルタナティブツーリズムをはじめさまざまな呼び方があった。
- 15) 初出はUNWTOの前身であるWTOの報告書(1993)である。
- 16) 世界観光機関(UNWTO)、WEBサイト。
- 17) ニューツーリズムについて、観光庁は「厳密な定義づけは出来ないが、従来の物見遊山的な観光旅行に対して、テーマ性が強く、体験型・交流型の要素を取り入れた新しい形態の旅行を指す」と定義している。また、スペシャルインタレストツーリズム(Special Interest Tourism)とは、特別な目的に絞った旅行のことであり、SITと略される。

- 18) 『観光のまなざし』は1995年に第1版が邦訳されたのち、2014年に第3版が邦訳され、地理学者のJ. ラースンとの共著で加筆されている。
- 19) アーリー (2011=2014)、1-5ページ。
- 20) 逸脱論はR. マートンの研究をはじめ社会学では重要な概念である。
- 21) アーリー、前掲書、6ページ。
- 22) アーリー(1990=1995)、148、240-241ページ。
- 23) 安村・堀野・遠藤・寺岡編著、前掲書、200-201ページ。
- 24) ブーアスティン(1962=1964)、126-127ページ。
- 25) マキヤーネル(1999=2012)、110ページ。
- 26) 安村・堀野・遠藤・寺岡編著、前掲書、65ページ。
- 27) ホブズハウム(1983=1992)、9ページ。
- 28) 橋本(2011)、155ページ。
- 29) 井上(2010)、159-160ページ。
- 30) 井上(2016)、83-93ページ。
- 31) アーリー(2011=2014)、7ページ。
- 32) 2000年以降、ネット社会の到来やリーマンショックによる金融危機による社会変動の際にもニューノーマルという言葉が使用されている。
- 33) マイクロツーリズムは、自宅からおよそ1時間圏内の近隣への短距離旅行を示す用語で、星野リゾートの星野佳路代表によって名付けられた。
- 34) ワークेशनは、work（働く）とvacation（休暇）の造語である。なお、地方創成の切り札として「ワークेशन自治体協議会」が2019年に設立されている。
- 35) オーバーツーリズムの研究については、阿部（2020）に詳しい。
- 36) 秋田竿燈まつり（秋田市）や全国花火競技大会（大仙市）などイベント時には交通集中などが発生している。
- 37) 男鹿なび、WEBサイト。
- 38) 2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標で、17のゴールと169のターゲットから構成される。
- 39) 観光がSDGsに貢献する領域として、①包括的で持続的な経済成長、②社会的包摂・雇用創出・貧困軽減、③資源の効率化・環境保護・気候変動、

④文化的価値・多様性・遺産、⑤相互理解・平和・安全ターゲットの5項目が示された。

- 40) 観光庁(2019)、WEBサイト。なお、ユニバーサルツーリズムは、UNWTOが定義するアクセシブルツーリズム(Accessible Tourism)と同義で使用されている。
- 41) R. メイスは、公平性、自由度、単純性、分かりやすさ、安全性、省体力、スペースの確保の7原則を掲げている。
- 42) 内閣府(2017)。
- 43) 障害の社会モデルとは、障害のある人の社会参加に関して、障害に原因があるのではなく、社会に原因があるとする考え方である。
- 44) 長野県WEBサイト。
- 45) 本学国際観光学科では1年次の専門科目として「社会調査の仕方」を開講している。またインターンシップをはじめ多くの科目において学外での実習や見学を実施している。
- 46) フーコー(1975=1977)、8ページ。

■参考文献・資料(著者姓アルファベット順)

- 阿部大輔編著(2020)『ポスト・オーバーツーリズム—界限を再生する観光戦略』学芸出版社
- Baudrillard, Jean. 1981, *Simulacres et simulation*, Editions Galilee Paris
(=竹原あき子訳(1984)『シミュラクルとシミュレーション』法政大学出版局)
- Boorstin, Daniel, Joseph, 1962, *The image: or, what happened to the American dream*, Atheneum Publisher's. (=後藤和彦・星野郁美訳(1964)『幻影の時代—マスコミが製造する事実』東京創元社)
- Brendon, Piers, 1991, *Thomas Cook: 150 years of popular tourism*, Martin Secker & Warburg Ltd. (=石井昭夫訳(1995)『トマス・クック物語—近代ツーリズムの創始者』中央公論社)

- Foucault, Michel, 1963, *Naissance de la Clinique*, Universitaires de France. (=神谷美恵子訳(1969)『臨床医学の誕生』みすず書房)
- Foucault, Michel, 1975, *Surveiller et punir. Naissance de la prison*, Editions Gallimard. (=田村淑訳(1977)『監獄の誕生—監視と処罰—』新潮社)
- 橋本和也(1999)『観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方』世界思想社
- 橋本和也(2011)『観光経験の人類学—土産物とガイドの「ものがたり」をめぐって』世界思想社
- 橋本和也(2018)『地域文化観光論—新たな観光学への展望』ナカニシヤ出版
- Hobsbawm, Eric, J & Ranger, Terence, O, 1983, *The invention of tradition*, University of Cambridge (=前川啓治・梶原景昭他訳(1992)『創られた伝統』紀伊国屋書店)
- 本城靖久(1996)「トーマス・クックの旅—近代ツーリズムの誕生」講談社
- 井上 寛(2010)『障害者旅行の段階的発展』流通経済大学出版社
- 井上 寛(2016)「歴史的観光地におけるユニバーサルツーリズム—横手市増田重要伝統的建造物群を事例として」『ノースアジア大学国際観光研究』第9号
- 井上 寛(2021)「ユニバーサルツーリズムからみた観光の意義」ノースアジア大学国際観光研究』第14号
- MacCannell, Dean, 1999, *THE TOURIST*, University of California. (=安村克己、須藤 廣、高橋雄一郎、堀野正人、遠藤英樹、寺岡伸悟訳(2012)『ザ・ツーリスト：高度近代社会の構造分析』学文社)
- 島川 崇(2020)『新しい時代の観光学概論—持続可能な観光振興を目指して』ミネルヴァ書房
- 須藤 廣・遠藤秀樹(2005)『観光社会学—ツーリズム研究の冒険的試み』明石書店
- 須藤 廣・遠藤英樹(2018)『観光社会学2.0—広がりゆくツーリズム研究』福村出版
- Urry, John, 1990, *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*, London: SAGE Publications (=加太宏邦訳(1995)『観光のまなざし：現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局)

Urry, John, & Larsen, Jonas, 2011, *The Tourist Gaze 3.0*, London:
SAGE Publications (=加太宏邦訳(2014)『観光のまなざし〔増補改訂
版〕』法政大学出版局)

安村克己・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟編著(2011)『よくわかる観光社会学』
ミネルヴァ書房

明日の日本を支える観光ビジョン構想会議「明日の日本を支える観光ビジョン
ー 世界が訪れたくなる日本へ」2017年3月30日 (PDF形式26ページ)
<www.mlit.go.jp/common/001126598.pdf>

観光庁「観光立国推進基本計画」2017年3月28日 (PDF形式71ページ)
<www.mlit.go.jp/common/001177992.pdf>

観光庁「ユニバーサルツーリズムについて」2019年4月16日
<www.mlit.go.jp/Kankocho/sisaku/sangyou/manuaru.htm>

長野県「長野県ユニバーサルツーリズム推進事業」
<www.pref.nagano.lg.jp/kankoshin/universal_tourism.html>

内閣府「ユニバーサルデザイン2020行動計画」2017年2月20日 (PDF形式36
ページ)<[http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020_suishin_honbu/
ud2020kkkaigi/pdf/2020_keikaku.pdf](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020_suishin_honbu/ud2020kkkaigi/pdf/2020_keikaku.pdf)>

日本政府観光局「ビジット・ジャパン事業開始以降の訪日客数の推移」2021年
8月 (PDF形式1ページ)<[https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/
marketingdata_tourists_after_vj.pdf](https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/marketingdata_tourists_after_vj.pdf)>

男鹿なび「なまはげ柴灯(せど)まつり」<<https://oganavi.com/sedo/>>

世界観光機関 (UNWTO)「世界観光倫理憲章」<[https://unwto-ap.org/
document/world-tourism-ethics-charter](https://unwto-ap.org/document/world-tourism-ethics-charter)>

※本稿におけるWEBサイトの最終閲覧日は2021年2月18日である。

〔研究ノート〕

Dark Tourism Sites of Note in Akita Prefecture with Foreign Connections

デファルコ・リーア・アン
DEFALCO・Leah-Anne

The purpose of these research notes is to compile a list of areas of interest related to dark tourism in Akita Prefecture that are interesting from a foreign perspective, and to collect information on these sites and their history in English, as many sources of information are only available in Japanese. We will also examine if these sites are considered as “dark” tourism sites by the cities in the prefecture, and whether or not they are marketed as such in order to increase visitors to the sites.

These research notes are divided into three main events. Each part will begin with a summary of the history of the event, and then some of the most significant and/or most interesting dark tourism sites related to foreign victims or with ties to world events will be presented. Some data will not have any supporting references as the data was gathered via on-site visits to the locations. In those cases, the location of the information (e.g. museum exhibition etc.) will be clearly indicated in the footnotes.

Part 1 – The Bombing of Tsuchizaki Harbour in 1945 (土崎空襲)

Historical Background

One interesting historical event to occur in Akita Prefecture is the bombing of Tsuchizaki Harbour during the Second World War. Although not a significant attack in terms of its impact on the conclusion of the war, the attack is interesting as it was the last bombing carried out by American troupes of the entire war, and additionally is considered the furthest American bombing of Japan in terms of distance.¹ The bombing of the



Photo courtesy of Tsuchizaki Minato Port Area
Historical Museum

¹ Charles Reyher. *Memoirs of a B-29 Pilot*, 2008. page 146

harbour finished just scant hours before the official surrender was given by the Japanese Emperor.

The attack occurred late at night on the 14th and continued until 3:00 the next morning. B-29 Superfortress bombers dropped a stunning total of 12,047 bombs on the small harbour. Tsuchizaki port was chosen due to its strategic importance, and because it was the site of oil fields, oil reserve tanks, and a large oil refinery.²

As the civilian population of Tsuchizaki was fairly small at the time, casualties were not as high as the bombings/air raids of larger urban centres like Osaka, Tokyo etc. It is estimated that 250 people died, and a further 200 were injured.³

(Tsuchizaki Town was incorporated into the neighboring city of Akita on April 1, 1941)

Dark Tourism Sites of Note:

1) Tsuchizaki Minato Port Area Historical Museum and Victim Memorial Statue

Located about a 20-minute walk from the port in the old centre of Tsuchizaki City, the Tsuchizaki Minato Port Area Historical Museum holds a small but interesting exhibit on the bombing. Several survivors' accounts and historical items of interest are on display.⁴

Of particular note, the remains of a bombed building are incorporated into the design of the interior of the museum itself giving visitors a true sense of the impact.



Photo courtesy of
Tsuchizaki Minato Port
Area Historical Museum

2) The Tsuchizaki Bombing Memorial Statue

Located next to the port, the statue commemorates those individuals who lost their lives in the bombing. The design of the statue is that of a young woman holding a dove, facing out



Photo courtesy of
Tsuchizaki City

² Yahoo News War Archives. 未来に残す 戦争の記憶. <https://wararchive.yahoo.co.jp/airraid/akita/>. Access on Feb 15, 2022.

³ Yahoo News War Archives. 未来に残す 戦争の記憶.

⁴ On-site visit to the museum, August 14th, 2021.

Dark Tourism Sites of Note in Akita Prefecture with Foreign Connections

to sea. The statue was also erected to promote an end to war. The inscription reads:

On the eve of August 15, 1945, when Japan suffered a major defeat in its history, our hometown was hit by the onslaught of the U.S. Air Force bombing centered on the "Nippon Oil" factory, and about 184 citizens and military personnel became casualties. After that, in 1975, the "A-bomb Citizens' Conference" was established, and various memorial events have been held since then. With the cooperation of the public and the private sector, this memorial statue was constructed to bring peace to the spirits of the deceased. We also hope it will promote and protect a permanent peace in the world, the prosperity of our hometown, and allow spirits to rest in peace.

Summary:

The Tsuchizaki harbour bombing site is not labelled by the city as being a “dark” tourism site and nothing the museum exhibit describes it as such. It is also not particularly promoted as a tourism site. For example, it is not listed as a tourism site on the various official tourism websites of Akita City.

Considering the event’s unique nature as the last bombing of the Second World War and the longest bombing run conducted during the war, it is likely the location has more potential to attract tourist than in its current state. It seems as though the museum is more of a local memorial to the spirits of those who died than an attempt to reach tourist and inform people from outside Akita City.

Part 2 – Remembrance Memorials and Monuments to the 1983 Sea of Japan Earthquake and Tsunami (日本海中部地震大津波)

Historical Background

On May 26th 1983 at 11:59pm, an Earthquake occurred off the coast of Akita Prefecture. The magnitude of the quake was 7.7 and struck about 100 meters off the coast of Akita.⁵ The quake itself caused some structural damage and four deaths in Japan, but by far the worst of the damage was caused by the resulting tsunami with waves reaching up to 30 feet (14 meters) that rapidly

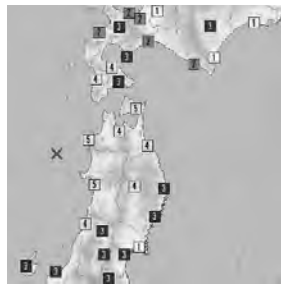


Photo courtesy of Japanese Meteorological Agency

⁵ National Research Council. Japan Sea Central Region Tsunami of May 26, 1983: A Reconnaissance Report. Washington, DC: The National Academies Press. 1984. pgs 2-6

headed towards Japan and South Korea.⁶ Due to the short time frame between the earthquake and the tsunami (about 7~14 min) and the belief that tsunami were extremely unlikely in the Sea of Japan, almost no one evacuated from the coast.⁷

Dark Tourism Sites of Note:

1) Swiss Tourist Monument

A Swiss tourist visiting the area with her husband, Magdalena Brandenburger, was killed while her husband survived. They were with a Japanese guide at the time. It is disputed whether or not the guide told her and her husband to evacuate. However, there is evidence to support the assertion that the guide did not advise the couple to evacuate. In particular, a report sourced from Kahoku news indicates their guide remorsefully saying “Had I any knowledge that an earthquake could cause a tsunami …” implying that he was regretful of his actions.⁸ Regardless, the Swiss woman and her husband were swept away by the water. Her husband managed to cling to a reef, but unfortunately, Magdalena was carried away by the tsunami and drowned.⁹



Photo courtesy of
GAO Aquarium

Her memorial is located on the grounds of Oga Aquarium, which is one of the most popular tourism sites in Akita. Her memorial includes a photograph and an inscription which reads:

On the afternoon of May 26, 1983, many casualties were caused by the tsunami caused by the Nihonkai-Chubu Earthquake with a magnitude of 7.7. Swiss traveler Magdalena Brandenberger (38 years old at the time) lost her precious life here as well. We erect this statue to wholeheartedly comfort Magdalena's spirit in a foreign land, and pray for international goodwill and peace.

⁶ Yoshinobu Tsuji et al. 韓国東海岸を襲った日本海中部地震津波. National Research Institute for Disaster Prevention, Vol 90, 1985. pgs 2-10, Chapter 4.

⁷ Kahoku News. 当時は、地震が来たら浜に逃げろと言われ…。
<https://kahoku.news/articles/20210530khn000002.html>, May, 2021. Accessed on Feb 10, 2022.

⁸ Kahoku News. 当時は、地震が来たら浜に逃げろと言われ…。 May, 2021.

⁹ Yoshinobu Tsuji et al. 1984

Other memorials and monuments to the tragedy:

2) Aikawa Minami Elementary School Tragedy Monument

On the coast of the Oga peninsula in Akita Prefecture, 43 elementary school students and their teachers were on a school outing at the beach. It was a sunny, calm day. The seismic intensity of the earthquake in Oga was only 4~5.5.¹⁰ Additionally, the earthquake occurred while the teachers and students were still on-route to the beach, and it was reported that they did not feel the strength of the earthquake while driving.¹¹



Photo courtesy of
Kita Akita City

By the time the teachers were warned, it was too late as the sea had receded and came back in in the space of a couple of minutes.¹² There was not enough time to gather the young students to evacuate and the tsunami wave swept a large number of students out to sea. The teachers and various fishing boats and leisure boats in the vicinity came to help rescue the children, however unfortunately, 13 elementary students died.¹³ A monument was erected on the location of the old school building.

3) The Calm Wave and the Maiden

The tsunami continued up the coast and a few minutes later reached Happo Town where 35 Tohoku Electric workers were working on the construction of Noshiro Port. All 35 workers also lost their lives. The town decided to erect a statue for the elementary children and the electric workers, and others who died in the tsunami. It is called the Calm Wave and the Maiden. The statue was constructed as a “memorial of the victims of the tsunami and to always remember this tragic day.”¹⁴



Photo courtesy of
Happo Town

¹⁰ Japan Meteorological Agency. <https://www.data.jma.go.jp/svd/eqdb/data/shindo/index.html#19830526115957>

¹¹ 涙に暮れた津波の海: 水辺の歓声、一転悲鳴. Yomiuri Shimben May 27, 1983, morning edition, page 23

¹² Yomiuri Shimben May 27, 1983, morning edition, page 23

¹³ Yomiuri Shimben May 27, 1983, morning edition, page 23

¹⁴ Happo Town Website. https://happouchou.com/wp/statue_young_girl_pedestal_repair/ Accessed on Feb 17, 2022.

Site Summary:

With respect to the Swiss woman Magdalena who tragically lost her life in the tsunami of 1983, there isn't much of a sense that a long-term connection to Switzerland was forged, which is a shame. It would be interesting if there had been more of a push to create a sustained bond between Switzerland and Akita Prefecture via intercultural exchange programs.

The area is not listed on the Prefecture's tourism websites as a "dark tourism" area, although a search on the Internet will reveal that the incident with the children is included in blogs on disaster sites in Japan.

Part 3 – Akita and the Boshin War

Historical Background

The Boshin War is of interest as it is one of the first modern-style warfare conflicts in Japan in which the foreign colonial powers of England and France had a hand in the politics of and offered military assistance to the Japanese government.¹⁵ The Hollywood blockbuster *The Last Samurai* starring Tom Cruise, was partially based on the events of the Boshin War. The war was widespread, but there were several important events that occurred in Akita, with the main one being the Akita War.

The Boshin War, also known as the Japanese revolution, was a civil-war fought between the Tokugawa shogunate, and samurai who wanted to return power to the imperial family. At the time, most of Akita Prefecture was part of the Dewa-province, and the Akita City area was called the Kubota Domain and was controlled by the Satake Clan.

The Satake Clan was initially on the side of the Tokugawa shogunate in the war and joined the Ōuetsu Reppan Dōmei, or Ōuetsu Reppan Alliance, however the clan became disaffected and they backed out of the alliance to then back the forces supporting the rule of the imperial family. Their former allies were angered by their defection and attacked the Kubota Domain. The Satake Clan were hard pressed, but managed to retain control of their domain until the Meiji Restoration abolished the daimyo system in 1871.¹⁶

The Tokugawa Shogunate was previously well-known to be anti-foreign, having put into place the *Sakoku*, the famous isolationist policy that Commodore

¹⁵ Christian Polak. 絹と光: 知られざる日仏交流100年の歴史 (江戸時代-1950年代. Tokyo: Hachette / Fujin Gahōsha, 2001. pg. 81

¹⁶ Eikō Onodera. 戊辰南北戦争と東北政権. 北の杜編集工房, 2004. pg 194.

Dark Tourism Sites of Note in Akita Prefecture with Foreign Connections

Matthew Perry of the U.S. Navy put an end to with his black ships in 1853. The Sakoku policy limited trade and interaction between Japan and the outside world. However, during the Boshin war, the Shogunate modernized its military forces significantly. British and French diplomats and military consultants both assisted in modernizing Japan's armies during the war with the two countries selling arms to both sides in the conflict.¹⁷

The Boshin war and the defeat of the Tokugawa forces directly lead to the Meiji Revolution, the modernization of Japan, and the end of the feudal system of samurai and daimyo.¹⁸ It can easily be considered one of the most, if not the most formative periods in modern Japanese history and is very important historically and culturally.

Dark Tourism Sites Related to the Boshin War in Akita

1) The Ruins of Kubota Castle/Senshu Park

The home of the Satake Clan was Kubota Castle located in what is now Akita City, the prefectural capital of Akita. The area became a provincial park named Senshu, and certain parts of the castle were rebuilt as a tourist attraction.

In Senshu Park, there are also three shrines and two museums. One of the museums is inside a rebuilt corner turret. In both museums, the history of the Boshin war and the Satake Clan is exhibited along with items belonging to the Clan, and historical weapons, household items, etc.

These weapons include modern weapons that were provided by the French and the British. It is an interesting counterpoint to see them alongside more traditional Japanese weapons and armour.



Photo courtesy of
掬茶 (Wikipedia)

2) Kakunodate Samurai Homes and Museums

Kakunodate is a historical, picturesque town located in the mountains not far from Lake Tazawako, in Akita Prefecture. The town was the home of a branch of the Satake Clan. During the war, battles were fought in the area and many interesting dark tourism sites are located in the city.¹⁹



Graves of Boshin War soldiers.
Photo courtesy of みちのく悠々
漂雲の記 Historical Website

¹⁷ Kōichi Hagiwara. 図説 西郷隆盛と大久保利通. Kawade Shobō Shinsha, 2004. pg 46

¹⁸ Andrew Gordon. A Modern History of Japan. New York: Oxford, 2003. pgs 64-65.

¹⁹ みちのく悠々漂雲の記. http://mitinoku.biz/hist_walk/hist_akita/?p=1637. Accessed on January 10, 2022.

Site Summary:

Senshu Park is located in downtown Akita City, and is a very famous tourism site. The history of the Satake Clan in the museums and that of the Boshin War are well described, but there isn't much mentioned about foreign involvement in the war. It would likely be more interesting to the many cruise ship tourists who visit the park if the exhibits were to include more information about the foreign impact on the political climate and Japan's military.

While Kakunodate is a well-known tourism area, it's mainly renowned for its cherry blossoms and samurai houses. Its ties to and importance in the Boshin war are much less well-known and not focused on in the tourism brochures available from the tourism information office, as well as the online websites.

Conclusion

While Akita Prefecture does not have a large number of dark tourism sites, it does have some moderately significant ones. However, the prefecture does not choose to advertise them as “dark tourism” sites. This is a shame because with the declining birthrate and aging society problems that Japan is currently facing, tourism is one way to bring in much needed revenue to rural areas, and dark tourism is one facet that could be utilized to promote the Akita area.

In particular, the bombing of Tsuchizaki port is an ideal site to expand upon. Its significance as the final bombing of the Second World War, and the unique interest of the area being one of the few oil fields in Japan could be used and promoted far more effectively by simply including the site on the City's official tourism website.

Although dark tourism sites are delicate and difficult to promote in certain ways, nevertheless they are opportunities to increase tourism and to recognize an important part of a dynamic cultural and historical landscape.

References 参考文献目録

Books, Periodicals, Research Papers, and Journals

- Carter, Kit C. et al. **The Army Air Forces in World War II: Combat Chronology, 1941-1945.** Ayer Co Pub, 1979.
- Gordon, Andrew. **A Modern History of Japan.** New York: Oxford, 2003.

Dark Tourism Sites of Note in Akita Prefecture with Foreign Connections

- National Research Council. **Japan Sea Central Region Tsunami of May 26, 1983: A Reconnaissance Report**. Washington, DC: The National Academies Press, 1984.
- Onodera, Eikō. 戊辰南北戦争と東北政権. 北の杜編集工房, 2004.
- Polak, Christian. 絹と光: 知られざる日仏交流 100 年の歴史 (江戸時代-1950 年代). Tokyo: *Hachette* / Fujin Gahōsha, 2001.
- Reyher, Charles. **Memoirs of a B-29 Pilot**. Lulu.com, 2008.
- Tsuji, Yoshinobu et al. 韓国東海岸を襲った日本海中部地震津波. National Research Institute for Disaster Prevention, Vol 90, 1985.

Newspapers and News Sites

- Kahoku News. 当時は、地震が来たら浜に逃げろと言われ…。
<https://kahoku.news/articles/20210530khn000002.html>. May, 2021.
- 涙に暮れた津波の海: 水辺の歓声、一転悲鳴. Yomiuri Shimbun, Morning Edition, May 27th, 1983. (Author unlisted)
- Yahoo News War Archives. 未来に残す 戦争の記憶.
<https://wararchive.yahoo.co.jp/airraid/akita/>.

Others

- Happo Town Website.
https://happouchou.com/wp/statue_young_girl_pedestal_repair/
Accessed on Feb 17, 2022.
- Japan Meteorological Agency.
<https://www.data.jma.go.jp/svd/eqdb/data/shindo/index.html#19830526115957>.
Data from the date of the 日本海中部 Earthquake of 1983. May 26th, 11:59 A.M..
- みちのく悠々漂雲の記.
http://mitinoku.biz/hist_walk/hist_akita/?p=1637. Accessed on Jan 17, 2022.

〔研究ノート〕

アドルフ・ホフマイステルの日本観に関する一考察

——1957年執筆「私の見た日本について」を中心に——

半 田 幸 子

1. はじめに

本研究は、日本の戦後の国際化の黎明期に当たる1957（昭和32）年に東京および京都で開催された国際ペン大会を機に来日したチェコ人作家・風刺画家アドルフ・ホフマイステル（Adolf Hoffmeister, 1902-1973）の日本観を文化史的視点から考察するものである。本稿では、ホフマイステルが帰国後に刊行した『メイド・イン・ジャパン¹』に収録されたエッセイ「私の見た日本について²」を中心に取り上げる。

時代背景および当該国際ペン大会の概要については、前号『ノースアジア大学国際観光研究』第14号に掲載された拙稿「1957年国際ペン大会に見る来日外国人の日本観——チェコ時挿絵画家ホフマイステルを中心に：研究の背景と今後の展望——」でまとめており³、本稿では割愛する。

本稿の構成は次の通りである。まず、ホフマイステルの略歴については必要最低限の内容をまとめ、彼の来日前に朝日新聞に掲載された記事および『メイド・イン・ジャパン』での記述から、来日に至るまでの日本への思い、および日本に関する知識とその背景について考察を加える。次に、来日後の日本観について『メイド・イン・ジャパン』に収録された「私の見た日本について」を中心に考察する。

本稿は、ホフマイステルの日本観に関する研究ノートとして、その一端を考察するものである。

2. ホフマイステルの略歴と来日に至るまでの背景

ホフマイステルの略歴については、前号で述べたが、ここでは改めて重要な

点について簡単に触れておきたい。

ホフマイステルは、1902年にプラハで生まれた⁴。代々法律家の家系であることから、一度は弁護士の道を行んだが、その傍ら、1922年からは記者活動に携わり、のめり込んでいった。1920年代のチェコ文化を代表する芸術家集団「デヴィエトスィル⁵」の設立メンバーにも名を連ね、チェコ・モダニズムを代表する芸術家の一人として知られている。社会主義期には、文化外交において重要な役割を果たした。日本ではカレル・チャペック（Karel Čapek, 1890-1938）ほどの知名度はないが、チェコ文化史においては、チャペックと同様に重要な役割を果たした人物である。

1920年代に風刺画家、記者、編集者として活躍したホフマイステルの1957年当時の肩書きは、プラハ工芸大学⁶の教授であった。1951年まで務めた駐仏大使を退任し、帰国した後、当該大学に新設されたアトリエ「アニメーションと映画」の初代アトリエ長に就任していた⁷。

『メイド・イン・ジャパン』に収録された、来日に至る経緯と来日前の記事を取めたエッセイ「見る前の日本について」によれば、ホフマイステルは、パリ滞在中に、当時の会長、ヴィーチェスラフ・ネズヴァル（Vítězslav Nezval, 1900-1958）と二名での日本行きを伝えられたようである。しかし、おそらく口頭での伝達であったため、ホフマイステル自身は話を真に受けていなかった。実際に、日本行きを明確に認識したのは、日本からの手紙を読んだときである。そのときの心境をホフマイステルは次のように綴っている。

大変なことになった。確かに私はパリで聞いた、私が留守にしているあいだに第29回国際ペン大会参加にあたってネズヴァルと私を日本へ派遣することが決まったのだ、と。だが、それまでまともに受け止めていなかった。もちろん私の妻も息子たちも私がまだどこかへ旅立つことに対してまったく反対することはなかった。ただ日本は心理的にも遙か遠く、また物理的距離も遠いように感じられた。しかしこの手紙、つまりすでにもう間に合わない時期になっていた⁸。

この記述から日本行きを意識する前の彼の日本に対する率直な印象が分かる。「まともに受け止めていなかった」や「日本は心理的にもはるか遠く、ま

た物理的にも遠いように感じられた」との記述から、日本という国は、国外出張の多い彼でさえ出張の話をまともに受け止めないほど、普段の生活では意識することのないはるか遠い存在の国であったのだ。

チェコスロヴァキアでは、1948年に共産党が政権を掌握し、社会主義体制が敷かれ、いわゆる西側諸国とは政治的にも経済的にも大きく異なる道を歩んだ。1956年、ソ連を中心とする共産圏で世界を動揺させる歴史的大事件が起きた。2月に、ソ連の第一書記ニキータ・フルシチョフ（Никита Сергеевич Хрущёв, 1894-1971）が1953年に没したスターリンを批判し、ソ連を含む共産圏にスターリン主義の見直しを促した。その結果、10月にハンガリーで動乱が起きた。だがソ連はその動きに対して軍事的に介入した。

国際ペン大会開催の前年は、このようなソ連だけでなく共産圏の政治や社会、ひいては世界をも揺るがす不安定な状況にあったのである。ハンガリーの一件は、大会の議題にも上がるほど、国際社会の関心ごとの一つであった。そのため、おそらく、チェコスロヴァキアから見れば、日本というまさに極東に位置する国に関心を持つほど、政治情勢的な余裕はなかったのではないだろうか。欧米諸国には居住も含めてすでに何度も訪れ、かつ来日の3年前には中国印象記『中国からの絵葉書』を刊行していたホフマイステルであっても、日本行きを真に受けないとしても何ら不思議でないほど、地政学的にも心理的にも、国際情勢的にも遠い存在になっていたことが考えられる。

話をホフマイステルに送られた手紙に戻そう。手紙は『朝日新聞』の影山三郎からのものだったことがエッセイに明示されている。影山三郎は、1937年に東京大学文学部心理学科を卒業後、朝日新聞社に入社、戦時中はレイテ島特派員も経験し、ジャーナリストとして日本の戦後のジャーナリズムを支えた一人である。1951年、「対日講和条約・日ベン安全保障条約」いわゆるサンフランシスコ条約が締結した直後のタイミングで、『朝日新聞』に家庭欄が復活したのだが、その際に39歳の若さでこの家庭欄の担当デスクを任された⁹。1957年にホフマイステルに手紙を送った頃は、学芸部部長になっていた¹⁰。

ホフマイステルの記述によれば、影山は国際ペン大会に参加する作家の何人かに自ら手紙を送り、来日前と来日後の日本の印象記の執筆を直接依頼している。『朝日新聞』の連載記事の初回の記述でそれが裏付けられる。

こんどのペン大会に、日本を訪れようとする人たちは、日本についてどんなイメージをいっているだろうか。大会をひかえ、本社はいくつかの国の人々に寄稿を依頼したが、すでに六人のひとたちから感想がとどけられた。きょうから随時この欄で紹介してゆくことにする¹¹。

ホフマイステルは、影山の手紙の文面をチェコ語に訳している。その内容と『朝日新聞』のこの記事に書かれていることは一致する。ホフマイステルが引用した影山の手紙の一部は次の通りである。

貴殿が一度も日本を訪れたことがないことを存じております。そこで、日本を見る前に、日本についての記事を一本、私に送っていただきたいのです。[…] 当然、貴殿がその目で見ただけの日本についてのもう一本の記事は、日本を離れてすぐに書いていただくものと想定しています¹²。

影山はまた、記事の内容について、「独自の、ありふれていない、興味深いトピック」を求めたようである。各執筆者にとっては、プレッシャーのかかる要望であろうが、この要望からは、依頼する側が、各作家の日本への印象がありきたりのものに終始しないよう努めた様子がうかがえる。先の引用でも「日本を訪れようとする人たちは、日本についてどんなイメージをいっているだろうか」とあり、また同じ記事の最後では、「海外の文筆家がどんな形で「日本」をとらえているか——それを知ろうというのがこの企画の目標でもある」と述べている。初めて多くの外国人作家が来日するにあたって、日本がどのように見られているのかを知ることの必要性を感じていたように思われる。この要望の結果、依頼された各国の作家は、知識だけではなく個人的な経験も織り交ぜながら日本観を記した。

余談だが、執筆言語についてホフマイステルは、「当然、記事は英語で書かなければならない」と記していた。8月22日付の『朝日新聞』に掲載された記事に訳者名が掲載されていなかったことと合わせて考えると、ホフマイステルは英語で書き送り、それを朝日新聞社内で日本語に翻訳したものと考えられる。英語を母語としない国の作家には、言語的にも負担を強いられる依頼でもあったのだ。

視線をチェコに戻すと、ホフマイステルがなぜ代表に選ばれたのかについては、まだ分かっていない。年齢や経験を考えれば、会長のネズヴァルとともに選出されること自体は自然だといえるが、議事録を見る限り、何らかの発表や報告をしたわけでもないため、会長だけでなく、ホフマイステルもともに派遣した理由は不明である。

いずれにしても、影山からの手紙がきっかけとなって、ホフマイステルは日本行きを実感し、また日本について初めて真剣に考えたようである。

3. 来日前の日本に関する記述

1957年8月22日付の『朝日新聞』朝刊6面の学芸欄にホフマイステルの寄稿文が「日本を想う」シリーズ第4弾として掲載された。この原文と思われる文章が、『メイド・イン・ジャパン』の巻頭エッセイにも全文引用されている¹³。後に紹介するチェコ文学研究家、栗栖継の記述に照らすと、このエッセイは、チェコの文芸週刊誌『文化』に掲載された記事が初出のようである¹⁴。

工芸大学の教授であったホフマイステルの寄稿の前半では、日本に関する知識として、世紀変わり目のジャポニスムの流行やヨーロッパへ与えた影響など、主に芸術や工芸、建築などの分野に関して紙幅を割いている。幼少期に叔母の家で見た日本の竹製の家具や掛け物、間仕切り、思春期に出会った絵画、建築、庭園、石庭、木版画など美術・工芸を中心に記している。加えて、同時代の日本映画の隆盛についても言及している。

1950年代といえば、小津、黒澤に代表される日本映画は世界の脚光を浴びた。1920年代に風刺画家としてチェコの芸術界を牽引したホフマイステルは、芸術全般に造詣が深かった。当然、世界の映画の動向も抑えていたであろう。記事には黒澤明監督の『羅生門』や新藤兼人監督の『原爆の子』の名を例に挙げ、「各地の映画祭で日本映画は成功を収めている」と記す。ただし、実際に鑑賞したのか否かについては触れていない。感想を述べていないことを自然に受け取るならば、観ていないか、あるいは印象に残らなかったのかのどちらかであろう。いずれにしても、芸術分野に関する記述はどれも、表層的なものが中心である。しかしながらこれは自然のことである。寄稿の依頼を受けるまで、日本行きのお話を真剣に受けとめていないのだから、表層的な記述に終始するの

は当然である。

だが、鋭い指摘もある。表層文化である絵画などの背景にある日本の精神文化について思いを巡らせる記述がある。

それは深いところに根ざした民族的で自文化的な特性に違いなく、それらが日本人の中に、規律と従順さに対する類稀なる感性を育んだのである。それはただの生まれながらの感性でも、才能でも、性質でもなく、何千年にもわたる教育の賜物なのである。魅力的な日本の芸術作品や日本の製品はどれも、リズムの正確さや踊りのステップ、あるいは私的な言葉のあやであっても、それらに向けた感性に基づく完璧さに対する粘り強い力を示している。

残念ながら、軍歌のステップに対する感覚もある¹⁵。

もちろん、これも一つの偏見と言えるだろう。まだ日本を訪れてもいないのである。だが、自分が幼少期からわずかに触れてきた表層的な文化の背景を知る必要があること、またその背後には必ずや何かしらの日本の特性があるのだろうと推測する姿勢に1920年代という芸術史に残る時代を牽引し、その後の職歴も旅行歴も豊富で、多くの文化を知るホフマイステルの感性、経験、教養が表れている。

彼は、ヨーロッパ人が表面しか見ていないことも批判している。その上で、風刺画家として独自の考察も加えている。日本人が気品と気高さ、慎み深さという仮面を常に身につけているということ、また、それを外国人の前で外すことなく、本当の顔は自分以外には見せないのではないかと考察するのだ。その際、プラハ出身のユダヤ系ドイツ語作家フランツ・カフカ（Franz Kafka, 1883-1924）の名前も挙げているが、おそらくこれは日本でカフカ作品の人気があることを知ってのことだろう。読者へのサービス精神も忘れない。

記事の最後では、これまでに出会ったごくわずかの日本人の話に触れている。イギリス留学時代に知り合った三人の学生との印象深い思い出のほかは、パリで知り合った画家の藤田嗣治、アメリカで知り合ったイサム・ノグチなど、芸術史に名を残す世界的に著名な人物との出会いについてである。しかしながら、彼らに関して多く記述することはなく、風刺画家としての自身の仕事の目的や

意義を踏まえ、日本人の仮面の下に隠されている素の人間の顔を見出すことを希望する。

『メイド・イン・ジャパン』では、来日後に、寄稿文への反響が大きかったこと、日本についてさまざまな寄稿を求められたこと、日本人は、外国人の日本観を知りたがることについても記した。

三日後に私が日本に到着してから、私は、例の記事がただ掲載されただけでなく、反響を呼んでいたということを知った。カゴいっぱいの手紙が、当然私はそれを読むことはできないのだが、編集部が届いていた。30年も顔を合わせることのなかった田尻氏が個人的に名乗り出て、英国での私たちの小旅行から多くの月日が流れた。その間に彼もまた大使になっていた。私たちの再会の翌日、彼は香港を経由して、中華人民共和国へ何らかの交渉のために旅立った。春日井氏もまた名乗り出て、彼はこの間に東京にある明治大学で教鞭に立つ政治経済の教授になっていた。ただ、三人目のもう一人だけは見つけることができなかった。

[中略]

このほんのわずかに関わった紙面によって、何十もの新聞社から芸術、食事、自殺、外国為替、北海道の観光、文学などについての批評を求める何十もの依頼を受けた。そのすべてがただただ日本に関して求めるものであった。日本人は彼らに対する外国人の見方に興味があるのだ。日本に対するチェコスロヴァキアの見解を¹⁶。

この記述は明快で、まずは日本での反響の多さとそれに驚くホフマイステルの様子が目に浮かぶ。また、最後の一文にある「チェコスロヴァキアの見解を」という記述からは、日本人がチェコスロヴァキアという遠い異国の人にとどのように思われているかに強い関心を持っていることに対してホフマイステルが驚きと友好的な感情を持っていたことがうかがえる。

ホフマイステルの記述だけではなく、『朝日新聞』の「日本を想う」シリーズの冒頭を読むことで、さらに当時の日本での様子もうかがい知ることができる。当該シリーズを企画した意図や目的として次のような記述がある。

ペン大会に参加する文筆家のほとんどは日本を間接的に——つまり書物や映画や人の話などだけで——知っているにすぎない。それらの人が描く「日本」のイメージと、現実の日本のズレが大きいとすれば、それだけ日本が知られていないことなのだ。そのようなズレを正すことも“東西文学の交流”をテーマとする大会の目的ではないか¹⁷。

下線部にあるように、「それだけ日本が知られていない」という表現からは、戦後まだそれほど月日が経過していないことを改めて思い知らされる。と同時に、だからこそ日本社会全体が、外国の人の目に映る戦後の日本を非常に気にかけ、日本をもっと知って欲しいという強い思いが感じられる。

戦後12年、敗戦の記憶をまだ強く引きずるなか復興を遂げ、高度経済成長へと突入していく過程において、日本人が諸外国に強い関心を持っていたこと、また他国からの印象に強い注意を払っていることの証であった。ただし、このような感覚は、当時に限ったことでもないように思われる。翻って2022年現在においても、本稿も含む外国人の日本観を問う研究も多く、外国人の目線を気にする点は変わっていないように思われるのだ。さらなる余談になるが、これは日本人の他人の目を気にする傾向とも何か関連しているのではないだろうか。

4. 「私の見た日本について」に見る来日後の日本への印象

既述のとおり、『朝日新聞』の学芸欄では、国際ペン大会をめぐる、参加した各国の代表に来日後に日本をどのように見たかの寄稿も依頼していた。それらの原稿は、シリーズ「私は日本を見た」に掲載された。シリーズの初回には趣旨説明が付された。その一部を抜粋する。

さて、ペン大会は終わった。あわただしい十日間ではあったが、外国の代表者たちはそれぞれ強い“日本の印象”を心に刻んだようである。来る前、そして来てから、彼らの影像是どのような印象に変ったであろうか。描いていたイメージはそのまま実感で裏づけられたという人もいる。自分の日本観はなんと的外れだったかと考えなおした代表もいる。そこで、さきに寄稿をもとめた十人に、ふたたびペンをとってもらった¹⁸。

記事には「十人」とあるが、筆者が調べた限り、実際には6名の記事しか掲載されていない。シリーズは第6回（1957年11月14日に掲載）で途絶えた。最初のシリーズに掲載された順に挙げると、チェコ代表のホフマイスター（当時の読み）、デンマーク代表のケルビン・リンデマン、西ドイツ代表ヘルムート・フォン・グラーゼナップ、ポーランド代表のアントニ・スロニムスキ、これら4名の記事は、当該シリーズ内で掲載されることはなかった。おそらく、4名の作家らは帰国後、多忙など何らかの事情により、原稿の送付を怠った、あるいは、失念したのではないだろうか。シリーズを企画した『朝日新聞』側で、原稿を意図的に掲載しなかったとは考えにくいいため、原稿が届かなかったと推測するのが妥当であろう。

シリーズ「私は日本を見た」の最後に掲載された第6回の記事から5ヶ月後の1958年4月22日に、チェコ文学研究家、栗栖継によってまとめられた「ホフマイスターが見た日本」と題する記事が掲載された。栗栖は、ホフマイステルが年末にチェコの文芸週刊誌『文化』や『文学新聞』に日本の印象記やペン大会ルポルタージュを連載し、1958年『文学新聞』新年号のアンケートでは、今後の計画として「日本印象記」を書き上げる予定だと述べている旨を紹介した。今となっては、「日本印象記」として書き上げるとされたものが、年末に連載された日本印象記やペン大会ルポルタージュをまとめたものであり、また、それは1958年に『メイド・イン・ジャパン』として結実したことが分かる。

栗栖がどのようにしてこれらの記事を入手したのかは不明であるが、言えることは、おそらく栗栖は紹介した記事すべてに目を通していたのではないかということである。1950年代の日本で、遥か遠いチェコの新聞や雑誌がどれほど簡単に入手できたであろうか。考えられるのは、ホフマイステルやその関係者から直接入手したことである。栗栖は1910年生まれで、チャペックや、ハシェクなど多数のチェコ文学を日本に翻訳紹介した人物である。ペン大会ではホフマイステルらと交流を持ったことであろう。さまざまな会合に呼ばれたことをホフマイステルも自著で明かしていることから、なんの接触を持たなかったとは考えられない。したがって、多忙を極めたホフマイステル、あるいは関係者から記事の送付を受けてまとめたと考えるのが自然である。

いずれにしても、栗栖による「ホフマイスターの見た日本」は『メイド・イ

ン・ジャパン』に収録されているエッセイの要点をまとめており、簡潔で分かりやすい。これを読めば、ホフマイステルの来日後の大まかな日本観は理解できてしまうが、ホフマイステルの記述を細かく評価するものではない。本稿では、より細かい記述に目を向け、ホフマイステルの来日後の日本観の一端を明らかにする足掛かりとしたい。

『メイド・イン・ジャパン』では、日本一般に関する記述として、二つに要点を絞ってまとめている。一つは「自然」、もう一つは「人々」である。自然については、富士山について自然科学的な視点からと文化的あるいは宗教的な視点を織り交ぜて、巧みに描写する。その上で、日本の自然や街並み全体を、当時からヨーロッパでも人気の高い日本庭園や盆栽になぞらえて、その美しさを強調している。と同時に、火山の多さも説明し、その脅威や恐怖、それと隣り合わせに生きることの意味について自分なりに解釈を加えようとする。

ホフマイステルは、日本では美と恐怖が横並びで存在していることを指摘する。その上で、カフカの名前を引き合いに出し、日本人学生の間で広く読まれている理由を説明する。その理由とは、カフカが、「微笑む美しさの幸運の影に身を斬るような官僚的な恐怖、すなわち真新しい雪にさえも印を残すような恐怖が潜む環境での活力を理解していたから¹⁹⁾」だという。つまり、カフカの描いた世界観と日本の自然がもたらす美と恐怖の隣り合わせには共通するものがあるというのだ。加えて、この恐怖には、自然だけではなく広島での原爆投下による悲劇も含まれた。

ホフマイステルはまた、「実際の経験は印象を裏付ける」とも述べており、短期間の滞在では、来日前の印象が覆るのではなく、むしろ裏付けるものとなったようである。自然に対する印象は来日後の経験によって裏づけられたようだが、人々に対する記述は、具体的ではなく抽象的な話に終始している。おそらく市民と接する機会がそれほど持たれなかったのであろう。

日本の人々に関しては、冒頭で広島の前爆とともに語られている。日本人が、前爆という「人類の最大の集団的悲劇」を経験してもなお、日常生活における微細なるものの魅力に目を向ける「類稀なる」感性を失うことはなかったとの見解を示す。その微細なる物の一つの例として庭園、なかでも木々や石の配置を挙げている。庭園に限らず、日常におけるものの量、形、色、配列などに規

則が存在しており、これらが、また人間と物との関係を構築し、それが人々を取り巻く舞台となっていると指摘する。つまり、調和のなかで人々が暮らす姿に美しさを見出しているのであろう。それゆえに、当時、台頭し始めた日本の富裕層がヨーロッパ調あるいはアメリカ調のものを日本の家屋に取り入れようとしていることに対しては強い懸念が見られる。

日本人ができるだけヨーロッパ的になろうと努力するとき、日本人は痛ましい程におかしな方向へと向かってしまっている。そうした日本人はたいてい、表層的で浅薄な中流階級の、信じられないほどの悪趣味へと墮落するのだ。日本の富裕層の家庭にあるヨーロッパ調に整えられたごく普通の部屋は、安っぽい田舎趣味、田舎の家具、それとアメリカ中東部の樂園の混ざり合いによってまったく驚かされるものとなっている²⁰。

このような指摘が人々に関する記述の半分を占めるほど、日本と欧米のスタイルの共存に対する嫌悪と懸念が強く見られた。このスタイルを悪趣味な異国趣味と批判するが、それがすでに日本の日常生活に浸透しており、人々が意識しているか否かに関わらず、それが日常における相克だと断じる。加えて、この点については、乗り物の中から見るだけで十分であり、この相克の壮大な歴史的意義を理解するには近づいてみる必要もなく、「それは日本文化とアメリカ文明との相克なのだ」として、このエッセイを終える。つまり、戦後のアメリカによる統治による影響の大きさを物語っていると指摘しているのではないだろうか。

ホフマイステルの指摘自体もまた表層的にとどまらざるを得ない部分もある。だが、風刺画家としての視点、すなわち見えているものの裏の面を掘り下げる視点の鋭さは、少なくとも彼の短期滞在での日本観において力を発揮している。また、日本の簡素な美に対する評価は、1920年代のチェコ・モダニズム、すなわち簡素を是とした芸術界を牽引した芸術家としての感性によるものともいえる。ホフマイステルが来日前に見たいと言った仮面の下の本物の顔は、本稿で取り上げたエッセイでは見られなかったが、栗栖の指摘によれば、国際ペン大会のルポルタージュにおいて、川端康成をはじめとする実際に接する機会のあった身近な日本人については、そのほんの一部の真の顔を垣間見ることが

できたようである。国際ペン大会の様子を綴ったエッセイの分析も進めることで、ホフマイステルのさらなる日本観が明らかになることであろう。

5. おわりに

本稿は、1957年に初来日を果たしたホフマイステルの来日に至る経緯、その思い、来日前の印象と来日後の印象について、『朝日新聞』の記事および『メイド・イン・ジャパン』収録のエッセイを通して、ホフマイステルの日本観の一端を考察した。ホフマイステルについての研究は日本では未だ手付かずであり、本国での当時の華々しい活躍とは裏腹に、研究が進んでいない。本稿で見てきた通り、ホフマイステルが来日し、また日本について記述したことは日本とチェコあるいはチェコスロヴァキアとの交流史の一端を明らかにすることにもなり、また外国人による日本文化論の歴史に新たな視座を加えることにもなる。

ホフマイステルの日本滞在は、ペン大会前後の期間というほんの僅かであるため、長期にわたって滞在した外国人のもののほど深い考察には至らないかもしれない。しかしながら、1957年という時代的背景、ホフマイステルの経歴や旅行歴を鑑みれば、ホフマイステルの来日経験とその旅行記を考察することに意義は見出せるであろう。加えて、観光客としての視点というのは、表層的であるがゆえに、あまり考察の対象となる機会がない。だが、長期滞在者の視点を読み解く上での比較対象として有効だと考えられる。

日本に長期滞在したチェコ人といえば、近年では、バルボラ・マルケータ・エリアーショヴァー（Barbora Markéta Eliášová, 1874?-1957）に関する論考がブルナ・ルカーシュによって発表されている。時代はホフマイステルよりずっと前の大正・昭和初期であり、かつ属性は女性旅行家、滞在目的も、ホフマイステルのような仕事で命じられてというものとは異なる。だが、日本を訪れた、遠い異国チェコ人という点は一致しており、比較することにより、いずれの考察もより豊かなものとなるであろう。

本研究はこのような外国人の目に映る日本像に関する研究の一端を支えるものとしてさらなる考察を続けていきたい。本稿は、ホフマイステルの日本観のごく一部でしかない。今後は、彼の活動全体をより幅広い視野で捉えることでホフマイステルの日本観にさらに深みのある考察を加えたい。

注

- ¹ Adolf Hoffmeister. *Made in Japan: Cestopisná reportáž o zemi, kde vybuchla první atomová puma*. Praha: Československý spisovatel, 1958.前号の拙稿では、『日本製』と訳出したが、原題においても原語であるチェコ語ではなく英語での表記を用いていることから、本稿では外来表現としてカタカナ表記に改めた。
- ² Hoffmeister. „O Japonsku, než jsem je viděl“, In: Hoffmeister. *op. cit.*, s. 7-15.
- ³ 日本での開催について、目野由希「島崎藤村と対インド日本文化外交の挫折——戦前期日本ペンクラブによる日印交流史」(『文学研究論集』第36号、筑波大学比較・理論文学会、2018年、19-36頁)によれば、1936年の国際大会が初参加の日本が1940年に開催国となれるようインドの協力を得たが当該年での開催は断念し、その後1957年での東京開催にあたって、インド側が再度協力したことで、アジア初の国際大会が実現したとのことである(同32頁)。より詳しい経緯は当該論文を参照されたい。
- ⁴ 当時はオーストリア＝ハプスブルク帝国統治下であり、チェコスロヴァキアとしての独立は1918年のことである。ホフマイステルの生い立ちおよび略歴については、Vladimír Forst (ed.). *Lexikon České literatury: Osobnosti, díla, instituce: 2 / I: H-J*. Praha: Academia, 1993, s. 221-225. およびPetr Zídek (ed.). *Osobnosti Lidových novin: Životní příběhy lidí, kteří vytvářeli nejstarší český deník (1893-1989)*. Praha: Universum, 2014, s. 197-203.を参考にしている。
- ⁵ Devětsil, 1920-1931.「露」、「9つの力」(devět=9つの、sil=力)の意。画家、作家、詩人、音楽家、批評家、役者、舞踏家、写真家などによるアヴァンギャルド芸術家集団。戦間期のヨーロッパで最も長く活動したグループのひとつ。1920年10月5日に「デヴィエトシル協会」を設立。1930年代には、チェコ・シュルレアリスムのグループに引き継がれた。チャップリン(Charles Chaplin, 1889-1977)やロイド(Harold Lloyd, 1893-1971)も名誉会員として名を連ねた。1920年代のチェコ・モダニズム文芸運動の一翼を担った。Derek Sayer. *The Coast of Bohemia: A Czech History*. Princeton: Princeton University Press, 1998, p. 209.

- ⁶ 原語：Vysoká škola uměleckoprůmyslová v Praze 大学の日本語訳を前号での「プラハ芸術工科大学」から改めた。
- ⁷ プラハ工芸大学HP上「アニメーションと映画」コース設立70周年記念企画の紹介より（<https://www.umprum.cz/web/cs/grafika/filmova-a-televizni-grafika/sedm-desetileti-atelieru-animace-na-umprum-11654>）2022年3月3日最終閲覧。
- ⁸ Hoffmeister. *op. cit.*, s. 7. 拙訳、以下同様。
- ⁹ 影山三郎『新聞投書欄——民衆言論の100年』現代ジャーナリズム出版会、1968年、222-223頁および320頁。影山の略歴については同書掲載の著書略歴を参考にした。
- ¹⁰ 影山はのちに投書欄に関する著書や論文をいくつか発表している。
- ¹¹ 『朝日新聞』1957年8月16日付朝刊8面。
- ¹² Hoffmeister. *op. cit.*, s. 7.
- ¹³ Hoffmeister. *op. cit.*, s. 9-14. ここに収録されている文章と『朝日新聞』に掲載された寄稿文（日本語訳版）には多少の差異はあるが、本筋を変えるほど大きなものではない。この差異については、筆者はホフマイステルが『朝日新聞』に送付した元原稿を確認したわけではないため、日本語への翻訳上の省略や意識（あるいは誤訳）であるのか、書籍化の際にホフマイステル自身が一部書き直したのか、あるいはホフマイステル自身が英語とチェコ語で書く上で表現を変えたのかは不明である。本稿では、一部にいくつか差異がある点を踏まえ、両者を確認した上で、適宜より詳しい記述を基に考察する。
- ¹⁴ 栗栖 継「ホフマイスターの見た日本」『朝日新聞』1958年4月22日付朝刊6面。『文化』の原題および書誌データは*Kultura: Týdeník pro kulturu a umění*. Praha: Orbis, 1957-1962
- ¹⁵ Hoffmeister. *op. cit.*, s. 10.
- ¹⁶ Hoffmeister. *op. cit.*, s. 14-15.
- ¹⁷ 『朝日新聞』1957年8月16日付朝刊8面。下線部は引用者による。
- ¹⁸ 『朝日新聞』1957年9月16日付朝刊6面。
- ¹⁹ Hoffmeister. *op. cit.*, s. 48.
- ²⁰ *Ibid.*, s. 50.

主要参考文献

Hoffmeister, Adolf. *Made in Japan: Cestopisná reportáž o zemi, kde vybuchla první atomová puma*. Praha: Československý spisovatel, 1958.

朝日新聞社編『朝日新聞縮刷版〈復刻版〉』日本図書センター、1996年。

「第二十九回国際ペン大会議事録 一九五七年九月一日——八日於東京・京都」
社団法人日本ペン・クラブ。

Forst, Vladimír (ed.). *Lexikon České literatury: Osobnosti, díla, instituce: 2 / I: H-J*. Praha: Academia, 1993.

Sayer, Derek. *The Coast of Bohemia: A Czech History*. Princeton: Princeton University Press, 1998.

Zídek, Petr (ed.). *Osobnosti Lidových novin: Životní příběhy lidí, kteří vytvářeli nejstarší český deník (1893-1989)*. Praha: Universum, 2014.

H・M生「国際ペンクラブ大会におもう」『親和』第47号、1957年、5-8頁。

芦沢光治良、高橋義孝、北村喜八、松岡洋子、北川冬彦「国際ペン大会を前にして」『国際文化』第38号、1957年、2-9頁。

荒川龍彦「東西両洋文学の相互的影響——第29回国際ペン大会の課題」『国際政経事情』第24号、1958年、81-89頁。

奥隈栄喜「春井薫先生」『大学史紀要・紫紺の歷程』第3号、明治大学、1999年、99-106頁。

影山三郎『新聞投書欄——民衆言論の100年』現代ジャーナリズム出版会、1968年。

加藤 修「サザエさんをさがして——国際ペン東京大会——海外の作家集い輝いた理念」『朝日新聞』2019年9月21日付土曜別刷『be』3面。

キーン、ドナルド「日本文学を世界につなぐ」『週刊東京』第3巻第38号、1957年、18-19頁。

上林猷夫「国際ペン大会に来日した詩人たち」『日本未来派』第78号、1957年、4-8頁。

佐藤和夫「国際ペン大会立見席」『中央公論』第72巻第11号、中央公論社、1957年、224-226頁。

高橋健二「国際ペン大会始末記」『心：総合文化誌』第10巻第11号、1957年、53-59頁。

高橋義孝「第29回国際ペン大会印象記：主題は“ペンの使命に”——東京で開く国際ペン大会」『週刊サンケイ』第6巻第38号、1957年、13-15頁。

「チェコの素敵な前衛アドルフ・ホフマイステル」『芸術新調』第58巻第3号、新潮社、2007年、112-119頁。

徳永豊「献呈の辞」『明大商學論集』第76巻第2号、明治大学、1994年、i-ii頁。

中島健蔵「国際ペン大会」『新日本文学』第12巻第10号、1957年、144-145頁。

藤山愛一郎「第二九回国際ペン大会開会式への祝辞」『國際文化』第40号、1957年、14-15頁。

ブルナ、ルカーシュ「B・M・エリアーショヴァーと大正期・昭和初期の日本（一）——新研究の出発点およびその展望」『実践国文学』、2018年、114-122頁。

ベネロ、ジョージ「日本の魅力とは」『國際文化』第38号、1957年、12頁。

向井啓雄「国際ペン大会始末記」『新潮』第54巻第11号、1957年、92-99頁。

向井啓雄「第29回国際ペン大会印象記」『週刊サンケイ』第6回第38号、1957年、24頁。

〔活動報告〕

令和3年度私立大学等即戦力人材育成支援事業

—国際観光学科生の秋田県内企業への就職促進のための諸施策—

横 田 恵三郎

はじめに

本事業は平成28年度より毎年実施してきておりますが、その要諦は多重的にかつ複合的な就職促進プログラムを実施することによって学生のキャリアプラン形成に資することならびに県内就職への動機付けを図ることにあります。学生の一般的な傾向として自己分析を適確に行ない卒業後のキャリアプランを描くことに苦労している場合が多く、不安や悩みを抱えながら自信なく就職活動に臨んでいるケースが頻繁に認められます。既存のキャリア教育に加えこれら事業を絡めることによって学生のキャリアプラン形成を支援し意欲と自信を深めた上で就職活動を乗り切れるよう環境整備を図ることを目的としております。

その目的に沿って令和3年度はこれまでの継続プログラムとして「卒業生と在学生とのキャリア懇談会」、「県内企業等への訪問（現場）研修」、「観光系企業による学内講演会」の3件を、また新規プログラムとして「発信力を鍛えるためのフィールドワーク」、「県内遠隔地の企業等に対するインターンシップ」の2件を実施いたしました。何れもコロナ禍での開催となりましたので感染防止対策には特に留意し、マスク着用、手指のアルコール消毒そして相互に適度な距離を保つなど安全・安心な開催に努めました。下記にそれらの開催概要をご報告します。

記

1. 卒業生と在学生とのキャリア懇談会（継続プログラム）

(1) 具体的な狙い

学生が卒業後の職業キャリアを適切に描くにはきちっと自己分析し自身の希望・適性・能力や諸環境を踏まえながら、また反芻しながら捉えていく必要が

あるが現実的には多くが漠としたイメージを膨らましているに過ぎない。そこに手を差し伸べる目的で本学科1～3年生の在学生在が比較的年齢の近い卒業生との具体的な対話を通して様々な情報やアドバイスを入手し、自身の希望、能力、適性等と擦り合わせ整理することによってキャリアプランを描き易くすることを狙ったものである。

(2) 開催概要

①日 時 令和3年11月27日（土）13:00～16:45

②場 所 231教場、40周年記念館3階講堂

③参加者 国際観光学科卒業生 9名

- ・平成29年3月卒業：3名（金融・金融・農協）
- ・平成31年3月卒業：1名（宿泊）
- ・令和2年3月卒業：4名（旅行・航空・商社・流通）
- ・令和3年3月卒業：1名（鉄道）

国際観光学科在學生 約40名

国際観光学科教員 2名

(3) 内容

懇談会は二部構成とし、第一部は前半約1時間45分を大教場にて各卒業生からの自己・自社紹介、仕事の内容、後輩へのアドバイス等のプレゼンテーションと質疑応答にあてる「全体懇談会」とした。さらに休憩を挟み講堂に場所を変え後半約1時間30分を第二部とし卒業生毎のアイランドを設け、3回（1回あたり25分間）の入れ替わりによる卒業生と在學生による双方向の「個別懇談会」として実施した。

第一部「全体懇談会」



卒業生 自己紹介



参加在學生

参加卒業生の皆さん（9名）一人一人から自己紹介に続き、会社の概要、現在の職務、また当時の学生生活のことや就職活動の経験など各8～10分間程度のプレゼンを行ない、それに対して在学生との質疑応答の時間を設けた。

今回協力頂いた9名の卒業生



金融関連 M.Oさん
H29.3月卒業



金融関連 N.Kさん
H29.3月卒業



農協関連 K.Sさん
H29.3月卒業



宿泊関連 A.Kさん
H31.3月卒業



流通関連 H.Oさん
R02.3月卒業



旅行関連 K.Tさん
R02.3月卒業



航空関連 M.Tさん
R02.3月卒業



商社関連 T.Kさん
R02.3月卒業



鉄道関連 K.Oさん
R03.3月卒業

第二部「個別懇談会」

各卒業生によるプレゼンテーションの後、休憩を挟んで場所を講堂に移し卒業生毎にアイランドを設け個別懇談会を実施した（懇談時間1回25分間を3回実施）。在学生は全体懇談会でのプレゼンの内容またこれまで得ていた情報が

ら興味をもった異なる企業・業界を3社選んで懇談に臨んだ。企業による会社説明会とは異なり卒業生による生の声、率直なアドバイスや本音を聞くことが出来る貴重な機会となり、特に就職活動を間近に控える3年生にとっては大変有意義な場となったようである。



個別懇談会 全景



アイランドでの様子 1



アイランドでの様子 2



アイランドでの様子 3



卒業生全員で記念撮影

今回で6回目の開催となったキャリア懇談会も卒業生の理解・協力と在学生の意欲とが相まって成功裡に開催することが出来た。

再度この場を借りて卒業生の皆さんに感謝の意を表したい。

授業で行なうキャリア教育とは異なり、このキャリア懇談会やインターンシップのように自己の直接的かつ多面的な体験や経験の蓄積によって、視野を広げさまざまな視座をもつようになり成長に拘りつくもの信じている。

2. 県内企業等への訪問（現場）研修（継続プログラム）

(1) 具体的な狙い

秋田市内のシティーホテルの協力を得て肌理細かな且つ総合的な宿泊研修を実施し、学生が卒業後に向け観光系企業の職に対する興味・関心を確保し、コロナ後を見据え観光系企業への就職者を一定数確保することを狙いとした。また、ホテルビジネスについて机上で学習するに留まらず、秋田を代表するシティーホテルが高品質サービスの維持・向上に努めている要諦を、宿泊研修を通して体験・体感させ学生のモノの見方を広げ深掘りする成長の機会とも位置付けた。

(2) 開催概要

①日 時 令和4年1月20日（木）～1月21日（金）一泊二日

②場 所 秋田キャッスルホテル

③参加者 国際観光学科生 5名（2年生1名、1年生4名）

(3) 内容

・座学（一日目）

同ホテルの企画・広報課、ブライダル課、宴会サービス課、宴会セールス課、総務課、フロント課の各支配人より担当業務の内容や流れ、また部門間の連携



のノウハウなどについて学習した。

・現場見学（一日目）

座学で学習した内容を、更に理解を深めるために結婚式場、宴会場、客室などの現場を見学した。



チャペル見学



宴会場見学



客室見学

・宿泊体験（一日目）

地元のシティーホテルに宿泊経験のない学生が一宿泊者として当該ホテルのサービス、ホスピタリティを体感・体験することにより社員の仕事に対する熱意や努力等を理解し、仕事の意義を深く考える良い機会となった。

また、夕食後には国際観光学科の卒業生である社員の方と懇談の機会に恵まれた。



卒業生と懇談後に記念撮影

・発表会（二日目）

宿泊研修の総括として、研修で学んだこと、気づきを得たこと、視野が広がったこと、将来の方向等に思いを巡らせたことなどについて一人7～8分程度の

発表会を開催した。副総支配人から講評を得るなどまた意見交換の機会を設けた。緊張しながらの発表となったがプレゼンテーションを堂々と行なう訓練の場ともなった。



緊張しながらの発表



副総支配人による講評

学生の研修参加レポート（一部抜粋）

- ・ホテルで働くそれぞれの人が仕事に責任と誇りを持っていた。一人一人の行動がホテルの評価に繋がるその看板を背負っているプライドが皆さんをキラキラと輝かせていて純粋に格好いいと感じた。一つのことに縛られず挑戦する心、常に人前にいることを意識した身だしなみやマナー、広い視野で周りを見ながら常に考えて行動すること、それらが自分の理想とする人物像であることに今回気付いた。この機会を無駄にしないように残りの学生生活を頑張っていきたい。
- ・今回ホテル各部門の話を聞いた中で全員が言っていたことが『仕事を楽しむ』ということでした。自分自身が仕事を楽しくてやらないと続けられないと思うし、楽しくてやることでやりがいも感じられるものと思った。ホテル研修に参加しないと解らない、知らなかった部分もあるので参加出来て本当に良かったし勉強になりました。



副総支配人と参加学生

3. 観光系企業による学内講演会（継続プログラム）

(1) 具体的な狙い

日本政府は日本版DMOなど地方への誘客、特色ある地域産品の開発、旅行消費拡大等を目的に地域の多様な関係者を巻き込んだ地域づくりを行なう法人の設立を推奨してきている。それら法人は民間の手法を取り入れ地域の“稼ぐ力”を増強することにより地域の活性化を目指している。国際観光を学ぶ本学科生が将来、地域活性化の一翼を担うことが期待されるため平成31年に事業統合し株式会社として生まれ変わった(*)あきた美郷づくり(株)の幹部を招いて会社の考え方や実践の内容等を紹介頂き、学生が地域再生の大切さを学ぶ機会とすると共に県内就職への動機付けとして位置付け開催することとした。

(*)平成31年4月、美郷町観光協会が美郷温泉振興(株)、六郷まちづくり(株)、(株)道の駅雁の里せんなんと事業統合した新会社。令和3年8月には本学科生のインターンシップを初めて受け入れ次代を担う若者に対する啓蒙活動を積極的に行なっている企業である。

(2) 開催概要

①日時 令和4年1月17日（月）14:40～16:10

②場所 40周年記念館3階講堂

③講師 あきた美郷づくり株式会社 取締役観光企画部長 山下達史氏

④参加 国際観光学科生1～4年生 約30名

(3) 内容

あきた美郷づくり(株)は平成25年にJALと地域連携協定を締結しており山下氏はJALから同社への出向者である。あきた美郷づくりの目的は、通過型から滞在型の観光産業を目指し美郷町の産業振興へ貢献することであり、講演の前半は連携協定に基づく具体的な活動内容の紹介と美郷町の魅力を磨き上げるための様々な取り組みについて紹介がなされた。後半には参加学生をグループ分けし、与えられたテーマに基づき、グループで議論しそのアウトプットを発表するワークショップ形式をとった。

(テーマ)

「コロナ禍の影響で観光需要が低下するなか、秋田県の交流人口の拡大に向けて、観光協会や事業者はどのように取り組むべきか」

- ① 対象の地域あるいは観光コンテンツ
- ② 現状と課題
- ③ 有効と思われる解決策



山下氏による活動紹介（前半）



グループで議論（後半）



グループ毎の発表

学生の参加レポート（一部抜粋）

- ・山下さんが紹介して下さった観光コンテンツがとても沢山あり秋田の魅力を自分はまだ発見できていないと思いました。秋田で生まれ育ったからには秋田の魅力を県外の人に伝えられるようになりたいと思います。
- ・美郷町の食材を活用しJAL国際線機内食シェフが監修したメニューを提供したという点に興味を持った。機内食は普段食べることが出来ない特別なものというイメージがあるため、食を通して非日常性を感じることが出来、貴重な体験になると思う。
- ・今回のセミナーで気付いたことがある。秋田の中では当たり前のことでも他の地域に住む人々にとってはそうではないということである。食べ

物、温泉、祭りなど秋田ならではのものは秋田の観光に大きな強みとなるため秋田の観光資源を改めて確認し、どれほど貴重なものであるかを再発見していく必要があると感じた。

- ・各グループの発表を聴いて特に祭りを分散して開催するという意見に興味をもった。
- ・セミナーの最後に山下さんが故郷に自身を持つことの大切さを話されていたが、私自身もそれを忘れないように今後も地域振興について考えていきたいと思った。

(4) 所感

学生は美郷町がJALをはじめいくつかの企業と連携協定を締結し、企業の運営ノウハウをも活かしつつ地域の活性化に努力している事実関係に先ず驚いていたことが印象的であった。さらに県外出身者である山下氏が同社に出向してまだ3年程度であるにも拘らず美郷町のみならず県全体の観光資源、観光事情に精通していることが、観光を学んでいる学生にとっては自分たちももっと頑張らなければとの意識付けまたは叱咤激励を得たことは確かなようである。

講演会というどうしても一方通行にならざるを得ないものだが、そうならないよう双方向のコミュニケーションを求めた当方の依頼を見事に満たして頂き学生が楽しみながら聞き、議論し、発表が出来たことに改めて山下氏に感謝の意を表したい。

4. 発信力を鍛えるためのフィールドワーク（新規プログラム）

(1) 問題意識とテーマ

現状発信力が盤石であるとはいえない秋田において今後高齢化・人口減少がさらに進む中、秋田の魅力を発信し続け秋田を活性化させ発展させる担い手の中心は秋田の若者である。秋田は自然、食文化はじめさまざまな魅力を有しているにも拘らず、発信の担い手を育成していかなければ正に宝の持ち腐れに陥ってしまうことを危惧している。その問題意識に着目し、学生が外国人の価値観や嗜好をも意識した上で魅力的、効果的な発信力を身に付ける大切さを理解、納得しその手法やスキルを学ぶことによって発信の担い手に就く動機付けと県内就職に拘りつける事業として位置付けることとした。

(2) 実施概要

一般社団法人秋田犬ツーリズム、阿仁合コミュニケーション、上小阿仁村役場の絶大な協力を得て、学生６名（３年生２名、２年生１名、１年生３名）が８／２（月）～８／４（水）の二泊三日で上小阿仁村を訪れた。ＮＰＯこあに食農観応援隊の取り組みを取材すると共に現地在住の外国人２名（アメリカ、アイルランド）をインタビューし秋田の魅力、上小阿仁村の宝物は何かを英語で聞き出し同時に画像・映像にも収めることとした。外国人の視座、価値観等を理解するための議論や作業を経て、魅力的、効果的な発信内容を纏めた上で秋田犬ツーリズムが主催する９月の写真展（名称：上小阿仁村思い出の写真展 場所：道の駅かみこあに）において外国人から見た秋田・上小阿仁村の魅力を紹介するコーナーとして展示、発信することとした。

（一社）秋田犬ツーリズム：秋田県第１号の地域連携ＤＭＯ（まちづくり法人）

阿仁合コミュニケーション：北秋田市阿仁合にあるコミュニティスペースで主に地域活性化のための企画・イベントを実施

ＮＰＯこあに食農観応援隊：上小阿仁村において食、農業、観光を通じて地域おこしやまちづくりに関する事業を行なうＮＰＯ

・全体スケジュール

日程	行 程
８／２（月）	９：００ 秋田駅東口 出発 男鹿真山伝承館／なまはげ館 １４：００ 天然秋田杉「こぶ杉」 ＮＰＯこあに食農観応援隊取材 １７：３０ 宿泊旅館着 オリエンテーション・セミナー
８／３（火）	９：３０ 在住外国人Ｏ氏、Ｍ氏取材 １３：００ 取材内容の整理・議論 成果のまとめ① １７：００ 宿泊旅館戻り １９：００ 成果のまとめ②
８／４（水）	９：００ 展示内容物作成 １４：００ 阿仁合コミュニケーション着 １５：２８ 秋田内陸縦貫鉄道（阿仁合発） １６：３５ 秋田内陸縦貫鉄道（角館着） １８：００ 秋田駅東口 解散

8 / 2 (一日目)



男鹿なまはげ館見学



NPOこあに食農観応援隊取材



コブ杉の前で応援隊の皆さんと



取材内容のまとめ

8 / 3 (二日目)



上小阿仁村在住外国人へのインタビュー

令和3年度私立大学等即戦力人材育成支援事業
—国際観光学科生の秋田県内企業への就職促進のための諸施策—



O氏、M氏と共に記念撮影



効果的な発信を議論



取材した多数の画像を整理



旅館で夜遅くまで吟味



9月の上小阿仁村写真展で発信した成果

学生の参加レポート（一部抜粋）

- ・今回の活動に参加したことで自己分析をする機会に恵まれた。改めて自分が興味を持っていること、価値観、考え方などを知ることができた。他にも成長を感じたところはたくさんあるがそれら諸々ひっくるめて、自分を探れたことが一番の成長だと感じている。（1年生）
- ・展示品を作るにあたって、最初は先輩方に頼りすぎていた部分もありあまり意見を出すことができなかった。しかし、先生方からアドバイスを頂いたり1年生の中で話し合ったりすることで、徐々に意見を言えるようになり主体的に動けるようになっていったのが今回の1番の成長だと思う（1年生）
- ・私が今回の参加を通じて成長したと思うことは協調性です。今回、2年生は私1人の参加ではじめは不安な気持ちがあり内向的な部分があった。しかし、みんなでパネル作成の作業に入ったときに「みんなで1つのものを完成させるのってすごい達成感ありそう！」と思い、先輩方や後輩たちとコミュニケーションを積極的にとろうという気持ちになった。（2年生）
- ・今回初めてこのようなグループワーク形式で1つのモノを作り上げた。最初は1年生から3年生で学年が異なり1年生が3年生に気を遣う場面もあった。改善するためにリーダーを中心に話しやすい環境を作り始めたら、2日目から1年生がどんどん意見を言うようになりスムーズに話し合いが進み作品完成まで早かったと思う。グループが1つになって1つの目標に向かって物事をする機会はものすごくこの先の人生において大事になってくると思ったのでとてもいい経験になった。この先の就職活動に必ず生きてくると思う。自分自身この3日間で成長できたと思うので、今後に繋げていきたいと思う。（3年生）

5. 県内遠隔地の企業等に対するインターンシップ（新規プログラム）

(1) 背景と目的

国際観光学科では実習授業科目として「海外観光インターンシップ」ならびに「国内観光インターンシップ」を配置し単位認定している。これらの履修を

通した就労体験、社会経験は学生のキャリアプラン形成等に大きく資すると捉えており、国際観光学科に属する２年生・３年生は全員履修することを基本の運用としている。

その中、コロナ禍により令和２年度以降は環境が一変してしまい、海外への渡航はおろか県外でのインターンシップも実施が不可能な状態となってしまった。実質秋田県内企業・機関での実施に限られることになったがそれまで受け入れの中心であった秋田市内企業においても徐々に受け入れの枠が狭まっていく状況に陥ることになり、打開策として県内の遠隔地企業・機関でより広範に実施すべくあらゆるチャネルを通して調整を重ねることとした。

しかし、県内とは言え参加にあたっては相応の交通費、宿泊費が必要となり学生が安心してより遠隔地に赴き易くするよう令和３年度に初めて秋田県に交通費・宿泊費の補助申請を行ない承認頂いた初めてのプログラムである。県のご理解とご協力には衷心より感謝の意を表したい。

(2) 実績

所在地	企業名	参加学生数
大館市	秋田犬ツーリズム	２名
小坂町	AKITA INAKA SCHOOL	２名
美郷町	あきた美郷づくり	６名
鹿角市	ホテル鹿角	１名
*雄和	*日本航空秋田空港所	７名

*秋田市にあるが空港リムジンバス以外に公共交通機関が存在しないため補助対象とした。

以上

むすびにかえて

継続プログラム３件に加え今年度より新規プログラム２件を新たに展開し、結果計５件のプログラムをコロナ禍にあっても何とか工夫しながら円滑、成功裡に開催することが出来たことを率直に慶びたいと思います。これはひとえに秋田県をはじめ関わって頂いた企業、関連機関のご理解とご協力の賜物であり

この紙面を借りて深く感謝の意を表したいと思います。

学内での授業に加えご報告してきた内容のとおり切り口の異なる多面的な参加型・経験型の事業を実施することによって学生にとって知識とスキルの習得だけに留まらず大人に向けての成長、コミュニケーション力向上など人間力の更なるレベルアップに大いに資する機会になるものと確信しております。今後も更に工夫しながら“人財”を切り口に秋田県に貢献していきたいと考えております。

〔活動報告〕

地域再生論における事例研究

—八峰町・にかほ市におけるフィールドワーク—

井 上 寛

はじめに

一般に、地域再生とは「地域が主体になって行う自主的かつ自立的な取組により、地域経済の活性化、地域における雇用機会の創出その他の地域の活力の再生を推進するもの」と定義されており、秋田においても、地域のさまざまな人びとが協力しながら地域再生に取り組んでいる。法学部国際観光学科では2年次以上の学生を対象とした専門科目として「地域再生論」を開講している。

本講義では、「少子高齢化と地域再生」、「まちづくりと地域再生」、「地域ブランドの発信と地域再生」の視点から、行政をはじめ、実際に地域再生に取り組んでいる方々を招き講義をお願いしている。また本講義の特長として、教室内での講義にとどまらず、事例研究としてフィールドワークを行い、より実践的に学修することを目標として実施している。

令和3年度の地域再生論では、計3回、学外での事例研究を実施した。1回目は、2021年10月16日(土)に秋田県山本郡八峰町、2回目は10月31日(日)のにかほ市、3回目は11月6日(土)に仙北市において各自治体の協力のもと事例研究を実施することができた。本稿では、今年度新規に実施した八峰町と、学修テーマを変更したにかほ市での事例研究の記録を紹介する。

事例研究1 八峰町「あきた白神ツーリズムにおける地域連携と世界自然遺産」

八峰町は、秋田県北西部に位置し、東は県内唯一世界自然遺産「白神山地」の登録地を有する藤里町、南は能代市、西は日本海、北は青森県に隣接しており、東西が約19km、南北が約24kmあり、面積234.14km²のうち8割近くが森林で占められている。町の広大な森林は白神山地の一部で、「秋田白神県立自然

公園」に指定されているエリアもある。また、起伏に富んだ八森地区の海岸も「八森岩館県立自然公園」に指定されている。このように2つの県立自然公園を有する自然豊かなところが八峰町の特徴とであると、八峰町のwebサイトでは紹介されている¹⁾。

事例研究1では、八峰町産業振興課の山本望課長、鈴木慎太郎課長補佐、佐藤研成主任と八峰町観光協会板谷大樹事務局長にご協力いただき、2021年10月16日に、「あきた白神ツーリズムにおける地域連携と世界自然遺産」と題する講義と事例研究を実施することができた。

当日は、霧雨で天候が心配であったが、大学のマイクロバスで国道7号線・101号線を経由し八峰町へ向かった。そしてポンポコ山公園パークセンター（八峰町峰浜沼田字ホンコ谷地253-6）に到着したあと、「八峰町白神ガイドの会」会長でもある板谷事務局長より、地域連携DMO「秋田白神ツーリズム」の概要と「白神の恵み」をコンセプトにした地域連携と観光振興について事務局長の旅行業の経験を交えてわかりやすくご説明いただいた²⁾（写真1）。その後、再びバスに乗車し留山へと向かった。

留山とは、樹木の伐採をとめた山に由来するとされ、藩政時代から地域の人びとが守り継いできた里山の名称である。八森地区の留山は、日本海の海岸から直線距離で約3キロ、薬師山の東側に位置しており、水の目林道沿いにある。推定樹齢200年から300年以上ともいわれるブナやミズナラを中心とした広葉樹の天然林が残っている山とされる。地域再生論の事例研究としての狙いは、「地域の人が守り継いできた森」であることを学生に体感させることである。なお、留山に入山の際は荒廃を防ぐなどことを目的に八峰町白神ガイドの同伴を必要としている。

毎年8月に開催される「みこしの滝浴び」で知られる、白瀑神社を左手に見ながらバスは進む。途中からは舗装されていない水の目林道を進み、散策路の入口でバスを降りる（写真2）。散策路は、一周約850メートルの木道やウッドチップで整備されており、学生は五感を使い、自然に触れながらゆっくりと30分ほど留山の散策を体験することができた。再びポンポコ山へと戻り終了となった。バス車内ではガイドの業務のエピソードをはじめ、マーケティング戦

略や情報発信などについても言及していただいたことで、学生のモチベーションが大いに高めることができた実りある事例研究であった。

ケース2 にかほ市「鳥海山と日本海が生んだ奇跡の景観」

秋田県にかほ市は、秋田県南西部に位置する人口2万3,800人ほどのまちである。にかほ市観光協会のWEBサイトでは、「日本海と鳥海山に抱かれたまち」として、日本海の海岸線から鳥海山の山頂までの直線距離は約16kmと近く、世界的にも珍しい地理的特徴があると紹介されている³⁾。前年度までは、「中島台レクリエーションの森・獅子ヶ鼻湿原」と「元滝伏流水」においてエコツーリズムないしジオツーリズムの視点から事例研究をおこなっていたが、本年度はもうひとつの魅力である「象潟」を中心とした歴史・文化観光資源に主眼をおいた事例研究をお願いすることとした⁴⁾。

2020年10月21日(木)には、本学においてにかほ市商工観光部観光課今野伸二課長と佐藤大樹副主幹に、にかほ市の観光まちづくりについて行政の視点から講義をしていただいた。あらかじめにかほ市の概要を学修したうえで事例研究の当日を迎えた。

にかほ市での事例研究は2020年10月31日(日)に実施され、にかほ市教育委員会文化財保護課の齋藤一樹専門員と今野伸二観光課長にご案内いただいた。

現在は日本海東北自動車道の終点である象潟インターチェンジから、時折日本海を望みながら標高を下げていく。そして最初の目的地である、にかほ市象潟郷土資料館（にかほ市象潟町狐森31-1）に到着した。

郷土資料館では、齋藤一樹専門員に、鳥海山の噴火による象潟の成り立ちや道路工事で発掘された埋もれ木、景勝地として有名であった象潟に、1689（元禄2）年に松尾芭蕉が訪れたこと、文人たちの筆跡集である『旅客集』の平賀源内や小林一茶などの筆跡について、後述する地震直前に伊能忠敬が訪れていることなど、わかりやすく説明していただいた（写真4）。また、北前船や当地が輩出した木版画家である池田修三の展示も見学した。

バスに乗り、同中に点在する九十九島をみながら蚬満寺へと移動する。江戸時代後期の1804（文化元）年に、象潟では大地震が起こり、約2メートルも地

面が隆起した。景勝地であった象潟の景観が地面と化したのである。当時象潟を領域にしていた本荘藩は新田開発を進め、島跡を平坦にし、より多くの田園を確保する計画を立てたところ、蚶満寺の住職が中心となり保存運動を展開し現在のような景勝地が残されたのである⁵⁾。蚶満寺の駐車場にバスを止め、境内にある西施像の前で記念撮影をした（写真5）。

その後、近くにある九十九島のひとつである駒留島まで歩く。蚶満寺境内には羽越本線の線路が横断しており、鉄道会社のテレビ広告で撮影された場所である旨の説明看板も立てられていた。一方で、海に見たてられた水田は耕作放棄地の問題がある。島からは鳥海山を望むことができ、往時の景観を想像しながら蚶満寺の山門に戻り事例研究を終了した（写真6）。齋藤一樹専門員から「地域を徹底的に調べることが重要である」という熱いメッセージが学生の心に響いた。

おわりに

地域再生論は秋田県内の行政をはじめ、地域のご協力のもとに実施している。講義をしていただいた講師の先生方は、テーマに関する説明にとどまることなく、地域再生に関するそれぞれの視点から、そして自身の職業経験に基づく地域再生に取り組む熱意について学生に伝えていただいた。本講義の目的である地域再生に関する課題やその解決方法を理解することにとどまらず、地域再生を志すためのキャリア教育が副次的に実現しているといえるだろう。

われわれは、高等教育機関として、地域再生に資する人材を輩出していく使命がある。「観光」により地域再生していくためにはどのようにしたらよいのか。この問いを常に念頭に置き、この授業をよりよいものにブラッシュアップしていきたい。最後に、大館市、鹿角市、八峰町、男鹿市、秋田市、仙北市、大仙市、湯沢市、東日本旅客鉄道株式会社（順不同）の皆様には、業務多忙の中ご協力いただいたことをこの場を借りて御礼申し上げます。

■註

- 1) 八峰町WEBサイト「八峰町の概要」(www.town.happou.akita.jp)
- 2) 八峰町をはじめ、能代市、三種町、藤里町の4市町により、地域連携DMO「秋田白神ツーリズム」が構成されている。
- 3) にかほ市観光協会WEBサイト「にかほ観光ナビ」(navi.nikaho-kanko.jp)
- 4) 国際観光研究第14号の活動報告参照。
- 5) 2021年11月18日に実施した「事例研究のまとめ」において、長谷川(1996)を参考にして蚶満寺二十四世住職の覚林和尚による景観保全の取り組みについて学修した。

■参考文献

長谷川成一、資料(1996)『失われた景観』吉川弘文館
秋田県八峰町「秋田白神ー日本海と白神に抱かれる町【八峰町】」
環白神エコツーリズム推進協議会「SHIRAKAMI-SANCHI World Natural
Heritage site」パンフレット、地図
八峰白神ジオパーク推進協議会「HAPPO SHIRAKAMI GEOPARK」パンフレット
にかほ市観光協会「景勝の地象潟」パンフレット、地図

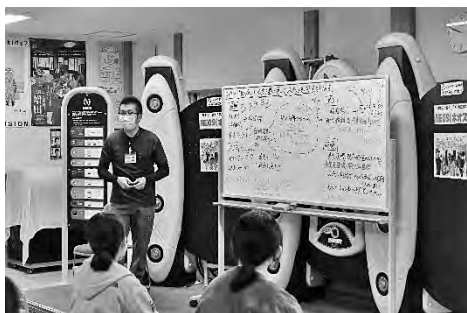


写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6

※写真は地域再生論の授業担当者が撮影した。

国際観光研究所 所員・研究員

所員・研究員

法学部

デファルコ・リーア・アン 所 長・准教授

千 葉 隆 一 教 授

塚 原 雄 二 教 授

横 田 恵三郎 教 授（運営委員）

井 上 寛 准教授（編集委員）

瀧 森 威 准教授

三 浦 薫 准教授

半 田 幸 子 講 師

2022年(令和4年)3月31日現在

執筆者紹介

論文

井上 寛 ノースアジア大学法学部准教授

研究ノート

デファルコ・リーア・アン ノースアジア大学法学部准教授

半田 幸子 ノースアジア大学法学部講師

活動報告

横田 恵三郎 ノースアジア大学法学部教授

井上 寛 ノースアジア大学法学部准教授

表紙の写真：真瀬溪谷三十釜（八峰町産業振興課提供）

ノースアジア大学国際観光研究 第15号

ISSN 1882-3904

2022年(令和4年)3月31日印刷・発行

編集・発行 ノースアジア大学 国際観光研究所

秋田市下北手桜守沢46-1

電話 018-836-6592

FAX 018-836-6530

URL <http://www.nau-grc.jp>

印刷 秋田印刷製本株式会社

North Asia University Research Bulletin of International Tourism

Vol. 15 March, 2022

CONTENTS

Article:

Tourism Education for Post-corona in Local Areas

..... INOUE Hiroshi 1

Note:

Dark Tourism Sites of Note in Akita Prefecture with Foreign Connections

..... DEFALCO・Leah-Anne 17

A Discussion about Adolf Hoffmeister’s Perspective on Japan

— “About Japan, Which I Saw” Written in 1957—

..... HANDA Sachiko 27

Report:

2021 Support Project in Private Universities and Others for Developing

Ready-To-Work Human Resources

—Measures to Promote Employment of International Tourism Students in
Companies in Akita Prefecture—

..... YOKOTA Keizaburo 43

A Case Study in Regional Revitalization Theory

—Field Work in Happo-cho Town and Nikaho City—

..... INOUE Hiroshi 59